

日本産学フォーラム リベラルアーツ企業研修会（第7回）

令和2年1月23日(木) 於大手町サンケイプラザ 311号室

小原：ちょっと早いですが、出席の方そろわれたので、始めたいと思います。明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。事務局から2点だけ。一つは宿題。任意の宿題ですけども、まだ出していらっしゃらない方もいらっしゃると思いますので、ご自身が振り返りのためにということであって、別にアセスメントでどうのこうのというわけではございませんので、ぜひ出しといていただけると、ご自身のためになるかなというふうに思います。それと、藤山さんのほうから日程をいただいて、懇親会の候補日を皆さんに2つ挙げてますので、最大公約数で決めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。事務局からは以上でございます。藤山さん、よろしくお願いいたします。

藤山：皆さん、明けましておめでとうございます。

一同：おめでとうございます。

藤山：本年もよろしくお願いいたします。なかなか厳しいスケジュールの中だと思いますけども、頑張ってやっていただきたいと思います。きょうは、市場原理っていう中の三つのうちの一番未来の課題に近いほうということで、私の最初の構想では、とにかく金融市場と新しいデジタル通貨と、そういうような題でお話をさせていただこうということだったんですけども、『ネオマネーの登場がもたらすマネー・決済システムの構造変化』ということで、副島さんにお話をいただくということになってます。また、それを、その後、松元さんから、『歴史に学ぶマネーの本質、ハイエクの貨幣発行自由化論』ということについてお話をさせていただきたいと思います。実は、今回のリベラルアーツの講座は、全て15人の先生のうち全て14講座が、アカデミズムの方なんですけれども、この講座は現役の方、それから財務省におられた松元さんということで、現場をよくご存じの方にお話をさせていただくという非常に貴重な機会でありますので、現場にいらっしゃる皆さんも、きょうは特別な気持ちで、お話が聞いていただけるんじゃないかというふうに感じます。

市場原理のところは、一番最初に先月、アダム・スミスのことを(####@00:02:45)先生にやっていただいて、経済政策の有効性みたいな話っていうのを5月か6月に元東大教授の吉川洋先生、立正大学の学長さんをお願いすることはご快諾いただいて、あとは日程だけ決めることになってるので、それとこの三つで、市場原理のことっていうのをすり込んでいただいて、皆さんがどのように感じるのかっていうのを考えていただきたいと思います。

それでは始めたいと思いますが、副島先生は、現在日本銀行の決済機構局の審議役、Fin Tech センター長でいらっしゃいます。1990年に京都大学をご卒業になられて、98年にワ

シントン大学の経済学修士でございます。日銀の入行は90年で、金融研究所であるとか金融機構局とか国際局とかフランクフルト事務所長などを歴任されておられます。金融システムのレポートやマーケット・レビューなんかの経験もございます。それから、函館や仙台支店長を経て、2018年4月より現在のお仕事と聞いております。昨日でしたかね、NHKのニュースで、デジタルマネーの話をヨーロッパの各国と今後どんなふうになっていくんだらうかっていう話を、日銀さんが始められるという話を聞きましたので、今、一番忙しいときに頼んじゃったんだなということで、大変申し訳ないと思ってますけども、この忙しいときに来ていただきました。松元先生のお略歴は、副島先生の話が終わってからご紹介申し上げることにしたいと思います。副島先生のお話が大体60分ぐらい、松元先生のお話が30分ぐらいということで、始めさせていただきたいと思います。それでは、副島先生、よろしくお願いいたします。

副島 皆さま、こんばんは。

一同 こんばんは。

副島 日本銀行Fin Techセンター長の副島でございます。きょうは、こうして、最近話題の中央銀行デジタルマネーを含めまして、マネーというものの役割、概念っていうのが、ここしばらくなかったような形で急速に変化していると。それで、その背景にあるようなものっていうのをもう一度、マネーって何だ？っていうところから問い直してみて、お話をしてみようかなと。全体の構成は、最初に、マネーとは何かと。そこで考えたマネーのコンセプトに従って、もう一回、今、出てきているキャッシュレス決済サービスって、裏で動いてるインフラってどんなふうなものが動いているの？と。皆さんよくインターフェースのところですね。QRコードとかNFCとかですね。その辺が注目されるんですけど、肝なのは、それを後ろで動かしてる資金決済インフラのほうなんですね。どうやってお金が飛んでってるのかというところの話をしたいと思います。それがどういう既存の決済インフラの構造に対して新しい動きになっているのかと。あるいはそうしたものの背景にある事情って何なのかっていうところをお話ししようと思います。

これも日常、決済・送金・振替、みんなお金を使う行為やってるんですけど、なので、決済インフラの階層構造をずっと眺めて考えてみるっていうのは、あまりにも当たり前過ぎになっちゃってるんですけど、実はこれが固まったのって、そんな昔の話じゃない。大体30年くらい前に固まって、それでずっと走り続けてきてるけれど、どうもそこに地殻変動が起こりつつあるだろうと。その一つが仮想通貨であったり、中央銀行デジタルマネーであったりするということです。

それから最後、もう一つキャッシュレス決済に絡んで起こっていることっていうのは、プラットフォーム・ビジネスですね。決済って、決済だけじゃ全く収益が出ないようなビ

ジネスのモデルになっていて、じゃあ何を狙ってこのマーケット出てきてたのかっていうのを、Two-sided market っていう産業組織論の観点から見てみようっていうのを最後に、ちょっと視点は変わるんですけど、お話させていただければ。ネオマネーとか、私の完全な造語です。これも私の見方としてお話をしてるものなんで、Disclaimer にあるように日本銀行の見解というわけではありません。

まず最初にマネー。どうやってマネーって生まれてきたんだというところで、よく言われる言葉、教科書なんかで見ると話っていうのが、4 ページのところに書いてあります。もともと原始時代っていうのは、マネーっていうのはなくて、物々交換が行われていたと。ところが交換するものが増えてくると、自分が欲しいものを相手が欲しいかっていうとは限らないと。要は N 個体があって、 N 個のマッチングをやるなんて、めったに合うわけがないから、大変だと。であるんだったら、ある物を選んで、それを起点にすれば 1 対 N で交換できるのではないかと。じゃあそれは一体何なんだ？と。何となく価値がありそうなもの。珍しい貝殻とか美しい石とか、あるいは金とか。そうしたもので、その財っていうのができてきた。そうすると、そのお金になる物っていうのは、価値尺度の基準となると。 N 対 N の交換比率なんて考えなくて、あるお金 1 単位とそれ何個、ある財一つをお金何単位と交換すればいいかということで考えれば、価値尺度の基準になるし、それから価値を保存するときにも、何単位お金で持っている、これで来月 1 カ月分暮らしていけるというふうに、非常に把握がしやすくなる。こうやって、マネーの 3 機能、決済手段であり、価値尺度機能であり、価値を保存する機能が生まれたっていうのが、よくある話なんですけど。

これが本当かと。実は、今、定説になってるのは、これ、多分うそだと。そうではないだろうと。歴史的にそういうのは観察されなかったと。この話が盛り上がってきた一つの理由として、ヤップ島、大きい石貨ですね。石のお金。あれで有名なヤップ島で、それが発見されたときに、たまたま、発見されたって、彼ら昔からそこで使ってたわけで、誰が発見したかって、西洋人が勝手に発見したって言うだけなんですけど。19 世紀末に、最初はドイツ人、そしてアメリカ、イギリス人か、が行って、そこでヤップ島に大きい石があった。その文化人類学者の人がじっと彼らの生活を見てると、とても不思議なことが起こると。交換できるような生産財って三つくらいしかないそうです。食べ物で栽培してるような物とか、魚とか。そんなに簡単だったら、 N 掛ける N でできるはずなんですけれど、物々交換してるわけじゃないと。じゃあ石使ってるかっていうと、石貨使って交換してるわけでもない。どうやってたかっていうと、取引を行うためのマネー・システムっていうのが、別途存在した。これ、その次のスライドでお話ししますけれど。

こういうヤップ島っていうのは、本当特殊ケースなのかと。そうじゃなくて、普通はやっぱりマネーっていうのは、さっき言ったような理屈で生まれてきたのかと思ったんですけど。じゃあ他の文明化していくプロセスの中での社会の発展っていうのを、いろんな文化人類学者の人が調べたけど、物々交換絶対やってたよねっていう証拠って、いくら探

しても見つからないんですね。そうすると、マネーって、教科書にあるような形で生まれてきたんじゃないんじゃないかと。今、こっちの考えが主流になって来てます。

じゃあ、ヤップ島のマネーシステムって、一体どういうふうに交換してたかというのと、要は貸し借り勘定を全部記録していたと。どうやって記録してたかっていうのは残っては、記録には残っていない。19世紀の終わりくらい、100年以上前なので残ってないんですけど。要は、何か相手から物をもらいましたと。例えばイモをもらいましたと。そしたら、私はあなたに借りができましたよね。借り1個、イモ1個分というのを何かに記録すると。木の幹に刻み付けるのか、石に刻むのか、何かひもにやってるのか分からないですけど、何かそうやって記録したと。あるいは相手に借りがイモ3個分あったら、今イモ1個分返してもらったから、これでイモ2個分ねっていうふうに、他の債権債務と相殺すると。相殺した後に残ったものは、自分の与信残高、債権であるというふうに管理して、将来の取引に。それで、そうすると価値保存機能ができるわけですよ。

というように、物理的なマネーっていうのはなくても、清算機能、数えてそれで貸し借り勘定が幾らあるかっていうのを記録して覚えておく。そういう装置がある。あるいは頭で覚えてたのかもしれないですね。そういうのがあれば、それは機能する。ただし、その貸し借り勘定がきちんと履行されるっていうのをみんなが信じてなきゃいけないと。1種の信用システムですよ。そういうふうにして機能してるっていうのが記録に残ってたわけですね。

そう考えると、じゃあマネーって何だ？っていうのを考えると、物理的な何か石とかそんな物ではなくて、要は貸し借り勘定記録するデータである。そして、それは必ず履行されるよねっていうのと、保証する信用システムであると。そして、それは、自分はおイモ1個分の借りがあるから、それを君にあげるよ。そしたら、君はこの債権を誰々に対して請求できるよというように、自分の債権っていうのが譲渡できる。人に渡すことができる。代わりに誰かに請求してっていうふうにしてできる。そういうふうに、マネーっていうのは最初から生まれてきたんじゃないのか。こっちのほうが、今、実は定説になってきてるわけですね。

こう考えると、今の時代、やってることは全く変わらないですね。電子マネーとか、あるいは預金口座ですね。預金というの、何で、預金が支払いをしなくなって、マネーになるかっていうと、そこの残高を引き落とすことによって、要はデジタルの数字をいじることによって、自分が銀行に対して持ってる債権、それを誰かに渡すことによって、支払いが完了するわけですよ。それって、全く今のシステムと同じなわけですよ。

じゃあ昔と今と何が違うかというのと、要はテクノロジーが非常に発展して、それが非常に正確にすばやく間違いなく、それから銀行に行かなくても、いつでもどこでもスマートフォンでできるようになったと。スマートフォンから誰かに送金をやる。そうすると自分が銀行に持ってた預金、債権の一部が誰かのところに飛んでいくと。というように、単に技術がとんでもなく進んだとか。それだけの時代なんだと。本質は何も変わってないんじ

やないのかということですね。

そう考えてみると、もともとマネーっていうふうに言ってたのは現金と預金だった。よく、教科書で、M2+CD とか M1 とか出てきますよね。マネーサプライです。あれって、現金プラス普通預金、あるいは定期預金っていうのがマネーの定義だったわけですね。それが典型的なマネーだったんですけど。譲渡可能な債権債務っていうのは、全てマネーの機能どんどん持ってくると、マネーのコンセプトがどんどん拡大してって、1 種の疑似マネー、あるいは疑似預金と言ってもいいようなものっていうのが、どんどん増えてきた。それが電子マネーの形態の一つになってきたし、それを管理する、クリアリングする、したり、それを管理したりするプラットフォームっていうのが登場してきた。これは何とかペイっていうのがそうなんです。

じゃあ何とかペイって何だ？って言ったら、ヤップ島で貸し借り勘定を木の幹に刻んでいた、あれと全く同じなわけですね。あるいは頭の中に記憶していた。これが、近年マネーのコンセプトが非常に拡大してきているということと、それからもう一つはポイントですね。ポイントサービス。例えば楽天で何か物を買ったりするとポイントが付いたり、あるいは Yahoo! で買くと、なんかポイントで 20 パーセント返してくれる、100 億円キャンペーンとか。ペイペイですね。ありましたけれど。あのポイントって何か？ これ、マイレージなの。飛行機会社のマイレージのポイントもそうなんですけど。発行する、例えば日本航空がマイレージを発行するっていうのは、日本航空があなたに、自分に対して行使可能な債権をあげますよ。その債権を行使すれば、飛行機のチケットを買うことができるわけですね。というようにある企業の債務として、もらった人の債権として出てきたポイントっていうのが、いつの間にかお金みたいになってきてるんですね。

というのは、ポイントを今度は電子マネーに交換サービスというのが、次々に出てくるわけです。そして電子マネーに 1 回なっちゃったら、それで何でも買えるようになってくるわけですね。そうすると、ポイントとマネーの境目がどんどんなくなってくるというように。ここでもまた、マネーのコンセプトの拡大が起こってきてるわけですね。というようにマネーの役割っていうのは見直した上で、キャッシュレス決済で、今、何が起きているかっていうのを、動きっていうのを確認しています。

10 ページに代表的な、いろいろな何とかペイとかですね。あるいは端末に近づけてピッと決済するニア・フィールド・コミュニケーション、NFC というんですけど、それを集めてみました。左側の枠が NFC を使った決済手段です。右側が QR コードですね、スマホとかに QR コードやバーコードを出して決済するものですね。一つずつは説明しませんが、ここで注目していただきたいのは、この QR コードのほうですね。縦のほうに幾つか、四つ囲みがあります。これ、何かっていうと、次のページで、同じスライドを出しておりますけれど、要は裏で動いている資金決済は何かと。インターフェースのところ、お店で実際に信号送るために動かしてるのは QR コードなんだけど。裏で実際にじゃあお金が動く資金決済どうやってるかっていうと、大体この四つしかないわけ。

一つは、クレジットカードをひも付けて、要はクレジットカードを使っている、使う代わりに QR コードでやってるのにすぎない。あるいはプリペイド。事前に銀行預金、あるいは他の手段からそこにバリューをストアしておいて、それを引き出すという形で決済する。あるいは銀行預金から直接そのままリアルタイムで引き落とすデビットカード。あるいは、ごめんなさい、デビットカードをひもづける。あるいはデビットカードを発行してなくてもカード自体で銀行口座からの即時引き落としができるようなやり方っていうのもある。これ、面倒くさいのは、例えば Origami Pay。きょう、メルペイに吸収合併されたっていうニュースが午後飛び込んできてびっくりしたんですけど、この Origami Pay っていうのは、後ろで動く決済システム、決済手段って三つ提供してたね。クレジットカードで決済してもいいですし、デビットカードで決済してもいいですし、預金口座から直接引き落とすっていうのを銀行や信用金庫の口座と連動させてやってもいいっていうふうに。資金決済手段がいっぱいあるから、結構理解が難しくなってくるんですね。

ただ、左の絵に書いてるように、要は何とかペイっていう、この黒いふりをしてるんですけど、それはインターフェースにすぎず、後ろのところで動いているのは、実は伝統的な決済インフラで。そうすると、カード会社や預金金融機関、銀行、信用金庫との協力っていうのが必要になってくるわけですね。というのが、このマネーの(####@00:18:26)です。こういうふうに新しくいろいろ登場してきた何とかペイっていうのがいっぱいあるんですけど、それがちょっと前の世代の Suica とか WAON とかですね。ああいう第一世代の電子マネーとどういうふうに異なるのかというのをまとめたのが、12 ページの最後でございます。3 点違いはあるだろうなと思ってます。

一つは決済機能が高度化したと。何かというと、Suica って 1 回お金、現金チャージしたら、払い戻すことできないですね。必ず使うしかない。それからもう一つ、人に送金することもできない。ところが LINE Pay っていうのは人に送金することができるわけですね。新しい何とかペイのほうが、電子マネーのほうが現金化可能だったり、送金可能だったりというふうに、より現金、マネーに近い機能っていうのを持ってるわけですね。これ、法律的に言うと、前払い式決済手段なのか、資金移動業の免許を取ってるのかどっちかなんですけど。前払い式支払い手段だとしたら、現金化はできないし、送金もできません。だから Suica は、この前払い式決済手段っていうので、免許を取って、JR でやってるんですね。

一方、LINE はあまり区別されてないんですけど、二つタイプがあって、LINE Cash と LINE Money って出してるんです。資金移動業をやるからには、本人確認をしなきゃいけないっていうのが、規制としてありまして、そうすると銀行口座とひもづけることによって、本人確認できました。なぜなら銀行は、きちんと口座作るときに本人確認をしてるからと。そうすると、LINE の電子マネーを使い始めるときに、本人確認をしてると、LINE Money、そうでなければ LINE Cash。実は二つ種類があるんですね。LINE Cash は、人に送金はできません。LINE Money の資格を持った瞬間に、送金や現金化ができるようになります。もち

ろん手数料は必要なんですけど。そういう違いが、実は細かいところであるわけですね。これが1番目。

それから2番目は、使えるシーンっていうのが変わってきたと。もともとのSuicaっていうのは、駅中、駅地下、そういうところで、店頭でのサービスの(####@00:20:38)があつてよかったんですね。Suicaでエレクトリック・コマース、Suicaを使ってAmazonで買い物できないわけですね。それからSuicaを使って金融サービスの購入、これもできない。ところがLINE Money、LINE Cashなんかを使うと、保険、LINE ほけんですね。損保ジャパンさんが出してる商品をLINEの中でサービスの中で買うことができるわけですね。というように、使えるシーンというのが、どんどん増えてきた。

この1番と2番何かっていうと、お金ってどこでも使えて当たり前ですし、人に渡せて当たり前ですし、そういうお金らしきみたいなもの、マネーネスって経済学では用語で言ってるんですけど、このマネーらしさって、1番2番によってどんどん拡大してきて、よりマネーの機能に近づいてきたというのが、最近の電子マネーの特徴なんだろう。それからもう一つある特徴っていうのは、マーケティングですね。決済データを蓄積して、それをマーケティングに使っていこうという意図というのが、新しい電子マネーほど、出てきた。これ、一番最後に、またお話をします。

こうやって、いろんな新しいマネーっていうのが出てくるんですけど、それを実際に動かそうとすると、大体新しい決済インフラ、裏でどうやって動かすかっていう、そういう仕組みを別途つくらなきゃいけない。そういう場合が多いってことです。クレジットカードのひもづけの場合には比較的簡単で、要は裏でクレジットカード動かすだけだから、クレジットカードさえ持っていればOKなんですよね。

ところがこの例1番に出したのは、プリペイド型、前払い式支払い手段なキャッシュレス・サービスです。これ、絵がちょっと複雑なんですけど。赤い線で書いてある所の上と下に分かれてまして、下は預金というマネーがどういうふうに動くか。上はLINE MoneyとかPay Pay ポイントとか、そういうトークン、預金ではないトークン。トークンって価値を表す何かの数字なわけなんですけど。そういう世界が二つに分かれて、管理されてるわけですね。といってもちょっと分かりにくいんで、そのプリペイド型のお金を使うときに、どういうふうな手続きで使うかっていうのを、1番から4番までの数字を見てみました。

まず使うためには、銀行Aに預金口座を持ってるユーザーAさんですね。このユーザーAさんがお金をプリペイしなきゃいけない。誰に対して払うのか。その銀行Aに何とかペイが、XX Pay が持ってる口座に対してお金を移動させるわけですね。これ、スマートフォンでできます。それやるためには、このXX Payは銀行へ提携してなきゃいけないわけですね。何とかペイのスマートフォンからそういう指示が来たら、はい、確かに銀行Aの講座の中で振り替えしますよっていう作業をしなきゃいけない。実際にそうやってプリしておく。次に、お金を払っただけではなくて、その対価として、今度はこのXX Payが見合いのトー

クンですね。例えば Pay Pay ポイントなり、LINE Money なり、そういうものをユーザーAさんに対してあげなきゃいけない。等価交換としてですね。それは上のほうのトークンのアカウント、これを動かすシステムの中で管理されてるわけですね。これが事前準備です。

実際に、じゃあこのユーザーAさんが加盟店Aっていうところで物を買いましたと。買った瞬間に資金決済が動くかという動きません。いつ実際にお金動くかという、加盟店Aには月に1回しか入金されないんですね。そういう意味では、預金っていうのはこのXX Payに残ってるままなわけでございますね。だけど、トークンは買い物をした瞬間に、ユーザーAさんのところから加盟店Aのところに数字がポッと移るわけだよね。そうすると、加盟店Aっていうのは、トークンをもらってる。もらってるけど、それはまだ入金はされていないと。入金された段階で、そのトークンっていうのが減らされると。そういうふうな管理になってるわけですね。

あるいはユーザーAさんからユーザーBさん、銀行Bに預金口座を持っているユーザーBさんに対してLINE Payを使って送金しましたと。そのときに何が起るかというと、実際動くのはトークンが動くだけです。この上側の世界において、ユーザーAさんのトークンがユーザーBさんのトークンのところにつけ換わるだけ。銀行預金は何も動かないです。じゃあいつ動くのか。ユーザーBさんがATMに行って、そのお金を引き落とした瞬間に、資金決済インフラが動き始めるわけですね。下の世界が動き始めるわけですね。

このシステム何が便利かというと、決済の回数を減らせるんですね。月に1回でよければ、加盟店Aにまとめるのは、100回でも1000回でも、ここで1カ月分まとめることができるわけですね。実際の資金決済インフラは動かない。逆にこれを1回ずつ動かす決済インフラっていうのもあって、デビットカードです。J-Debit。全然はやらなかったJ-Debitですね。あれ、何ではやらなかったかって、理由があって、毎回、1回買い物をするごとに、銀行口座から引き落として、お店の口座に1日2日遅れで入金するので、決済回数がすごく高くなっちゃうんですよ。しかもその決済コストが比較的高かったのも、とても普通の買い物をしたんじゃ、ペイしない、手数料ばかり高くて。なのでデビットカードが普及したのは家電店とかですね、保険料の支払いとか、そういうようなところばかりで、保険の外交員さんの手段になったりとか、そういうところでは払ったんですけど、結局全然はやらなかったという事情があります。

それから2番目の事例として、今度は国際送金サービスですね。これも、海外送金やると、何でこんな高いんだ？っていうのがよく話題になります。これ、従来のシステムを左側で書いていて、コルレス・バンキングという仕組みで、お金っていうの動かしてます。左の一番下にある、アメリカに対してドルを送金したい人がどうやってやるかっていうと、自分の地域銀行、取引先の地域銀行にお願いして、そこは日本の銀行Aっていうところですね。これ、例えばMFGですね、銀行、グループの銀行のところにお願いして、それがアメリカの相手方の銀行のところに伝言を飛ばすんです。決してお金が飛んでくわけじゃない。じゃあお金は、ドルはどうやって払われるのかっていうと、銀行Aがアメリカの銀行

Bにあらかじめドル預金口座を持ってるわけですね。これ、1種、プリペイドしておくようなものなんですね。決済、そこで決済をスムーズに行うために、事前にお金を持っておく。そして、それを払い込む、そうすると、銀行Aっていうのは、日本円をもらって、アメリカドルを払い出すというような機能を果たすことによって、アメリカの国内でドルが動き、日本の中では円が動きってということで、送金が行われるわけです。

これ、何が問題かっていうと、銀行が今、四つも登場します、ですよ。それからもう一つは、銀行Aはドル預金口座をここに持っとかなきゃいけないわけですね。支払いのために。非常に流動性を、こうやって預金を払う、全通貨について抱えてるっていうのは、やっぱりコストが非常にかかる。これに対して、最近出てきた、新しいやり方の一つとして出てきたのは、イギリスのフィンテック企業で、トランスファーワイズっていう会社がありまして、この人が非常にうまい手段を思いついた。

一番下の、右側の一番下の図に、日本の支払いの人がアメリカの受取人にドルを払いたいというのがあります。これ、どうやって実現するか。逆の取引を見つけてくればいいわけですね。アメリカにいる人がドルを持ってるんだけど、これを日本円にして払いたいと。一番上の所にあるね。この取引をうまく見つけてくることができ、両方を足し合わせれば、それは日本の円を下から上に動かす。あるいはアメリカではドルを上から下のほうに動かす。要は海外送金2本っていうのを、国内送金2本に組み替えることができるわけですね。そうすると、単に国内送金でやるにすぎないようにもってくると。もちろん、こんな組み合わせがいつもうまくなるわけじゃない、あるわけではないので、アンバランスは生じますけれど、そのアンバランス部分は1本に全部まとめて、伝統的な決済手段で海外送金すればいいわけなので、1回ずつの決済っていうのは非常に抑えることができるわけです。こんなアイデアっていうのも登場してきてるわけです。

それからもう一つ。仮想通貨を使った決済手段っていうのも登場してきて、左側に日本円っていうのをアメリカドルにしてアメリカの人に送りたいと。そこで真ん中にある仮想通貨の暗号資産のネットワークを使えばいいと。日本の中にいて、そこで1回暗号資産に変換するわけですね。具体的には、リップルという会社が運営しているネットワークを使って、そこで暗号資産に変換する。そして、そこで、暗号資産のシステム自体はボーダーレスなので、一瞬にして海外にいる、アメリカにいる人のところに飛ばすことができるわけですね。仮想通貨は。そしたら、その仮想通貨を今度はドルに変換してやればいい。そうすると、ここでマーケット二つ間にかませるので、価格が変化するかもしれない。市場変動リスクっていうのが一部生じてしまうわけなんですけれど、これをものすごく短時間でやれば、市場、価格が変動する可能性っていうのも大きく抑制することができるであろうと。かつ、暗号資産の取引コストっていうのは非常に安いわけなので、これも一つ有効なやり方として考えられてきたということです。まだ普及はしてないんですけど、新しい決済の仕方。

こういったものが次から次にどんどん生まれてきて、いろんな(#####@00:30:32)が

出てきて。この特徴は既存の決済インフラっていうのを迂回しようと。何で迂回したいかっていうと、やっぱり伝統的な決済インフラを従来どおりやると、非常にコストがかかる。それから遅い。なんで、即時決済できない。それから夜中は止まっていると。24時間1週間、いつでも決済したい。それからもう一つ、動機が違うのが、データを集めてマーケティングに活用しようという、そういう動機もある。それからもう一つは、新しくこの金融市場にフィンテック・サービスを提供するようになってきた人は、銀行でないケースが多いんですね。そうすると全銀システムとか日銀ネットとかにアクセスできないわけですね。そういう制約がある中で、どうやってじゃあこのビジネスをやるかっていうの考えたところ、今みたいなものっていうのがどんどんできてきたわけですね。

今の話の中で決済コストがかかるとか、アクセスできないとか、24時間動いていないとか、いろいろ制約があった今の決済インフラって、どんな姿をしているのか。それに対してどういう新しい動きが出てくるのかっていうのを、今の決済インフラの姿がどうかってところから振り返ってみたいと思います。こちらが、今の決済インフラの原型です。これ、できたの、1980年代の後半です。基本的には、この構図って今までずっと変わってないです。どういうことかっていうと、まず銀行、お客さんっていうのは銀行Aに口座を持ちます。その銀行Aの中で、お客さんが、お客Aがお客Bに振り替えなければ、銀行Aの中でコンピューターの数字を付け替えればいいわけですね。いわゆる振り替えというやつですね。そうすると預金通帳の数字がチョロッと動くだけであって、決済コストもほとんどかからずに、銀行Aのおなかの中でお金が振り替えられると。これが非常に効率的なやり方です。

ただ、自分がお金を送りたい人が銀行Aじゃなくて銀行Bに口座を持っていたとすると、何が起ころかという、銀行AとBの間で資金を送らなきゃいけない。そうなってくると、その1個上のレイヤーが、階層が必要になってきて、銀行間の資金決済クリアリングが、それ、全銀ネットのことですね。全銀ネットでAからBに、あるいはAからCに、日本中でもものすごくたくさんの取引が銀行を越えてあるんですけど、そういうのを全部寄せ集めて、そして足し上げれば、結局、銀行AとBの間にある関係っていうのは、AがBに払うか、BがAに払うか、どっちかなわけですね。そういうふうに非常に単純化すると。そうすると、その単純化した数字を実際に動かせばいい。

じゃあどこで動かすのか。そこに、一番上のレイヤーにある中銀RTGSシステム、これは日銀ネットですね。この日銀ネットに銀行っていうのは全部口座を持ってる。その口座の中で、A銀行からB銀行、もしくはB銀行からA銀行に計算した結果、日本中(####@00:33:34)全部まとめたもの結果の数字の、結果だけを動かせば、とても簡単に済むわけですね。これが今の決済インフラの構造でございました。日銀ネットができたのが、1988年。それからそれに移行して、全銀システム第3次オンライン化っていうのが出来上がった。真ん中のところが出来上がったのが、1987年だったわけですね。87年88年に今の決済インフラができたわけですね。

ところがですね。次のページは実際、このシステムを使って、どういうふうにお金が動いてるかっていうことです。繰り返しになりますけど、企業 Y が個人 X に対して、物を売って、X が企業 Y にお金振り込みたい。ところが、X と Y っていうのは銀行口座が違ったと。どうするかっていうと、A 銀行の口座のところに入金します。A 銀行は日本銀行の中のところにそのお金を入れます。そして、そのお金を日本銀行の中で、B 銀行の口座に動かします。B 銀行はその分だけ Y の預金口座にお金を入れます。こうやって、個人 X から企業 Y に対してお金が入金されるっていうのが、1 枚前のスライドの構造の、階層構造の中で行われてるわけですね。

ところが、ここに、キャッシュレス決済事業者っていうのが出てきた。何とかペイっていう人たちですね。そういう人たちって、立場どこに、今の階層構造のどこに位置してるかっていうと、銀行とお客さんの間に位置してるわけなんです。LINE Pay だと、事前にお金を受け入れるわけですね。お客さんからですね。そのお金を結局は、銀行 A の口座を通じて動かすしかないわけですね。前のスライドのところで、銀行 A と提携をしてっていうお話がありました。お客さん A っていうので。結局お金を動かそうとすると、銀行 A に全部頼むしかないわけだから、ここの 1 個下のレイヤーに位置するわけですね。これが何がよくないかっていうと、やっぱりコストがかかるわけです。この決済事業者が何かしようとする、銀行ではない、全銀システムにも日銀ネットにもアクセス当然できないわけなんで、ここに 1 回手数料が入る、発生すると。そうすると、この決済のレイヤー構造、階層構造って、深くなればなるほど、手数料がいっぱい発生する。そして時間もかかる、手間もかかるっていうふうに、コスト高になってしまう。

この問題って、世界中で生じていて、それに対してイギリスとオーストラリアでは、新しい動きっていうのが登場してきてます。何かっていうと、この決済事業者の人たちが、左にいる 2 人の人ですね。直接アクセスできるクリアリングハウス、全銀システムみたいなものを、小口専用版を作っちゃえばいいじゃないか、新しくと。そこにはもちろん銀行もアクセスできる。そうすると銀行と決済事業者は同じ立場で、この小口専用のクリアリングハウスを使うことができると。クリアリングしたものは、その結果は必ず決済しなきゃいけないので、決済の口座が必要になるわけですね。その口座をこの決済事業者の人に中央銀行があげればいいではないかということですね。これまでは金融機関、銀行や信用金庫や金融機関だけに中央銀行って口座を与えてたんですけど、何とかペイみたいな人たちに、中央銀行口座をあげると。開けてあげると。それ使って決済してくださいっていう動きが出てきた。一部の国に出てきたわけですね。かつ使うテクノロジーが新しいので、この小口専用のクリアリングハウスは 24 時間 365 日、しかも小口はまとめて決済するほうが効率的だったんですけど、RTGS というように 1 本ずつも決済してしまいたい。決済コストがすごく安くなったのでですね。そういう特徴を持った小口専用のクリアリングハウスっていうのが登場してきたっていうのは、新しいことでございます。

それからもう一つの動きっていうのが、今までの話は右側の中央集権型システムですね。

これも古い、30 年以上前に出来上がった構造の下で、これをどうやって効率化していけばいいんですかっていう発想で出てきたんですけれど。こっちを改善するのではなくて、全く新しいマネーシステムっていうのをブロックチェーンでつくってしましましょう。そこで、最初に日本円、あるいは US ドルからビットコインに換えて、ビットコインに換えてしまえば、そんなネットワークの中で瞬時に世界中どこでも動かすことができるわけじゃないですか。そうすると一見、とても効率的なように見えるんですけれど、残念ながらビットコインとかイーサリアムとかは価格がものすごく安定しないので、価値保存手段も、投機にはちょうどいいんですけれど、価格値が安定しないと価値保存手段にはならないし、それから単位をメジャーするのにも、毎日価格がコロコロ変わるんだったら、価値尺度基準にもなりにくい。そうすると決済手段にも使いにくいっていうことで、なかなかマネーにはならなかったという欠点がある。

そこで登場してきたのが、ステーブルコインというアイデアですね。その価値を保証どうにかしてあげればいいと。じゃあどうやって保証するかっていうと、そのトークンですね。トークン、仮想通貨でも何でもいいんですけれど。ネットワーク上でやりとりされるトークンというものを発行した人が、発行する 1 単位も、コインを発行した場合には、1 ドルを銀行預金とあるいは信託(#####@00:39:14)のところに、この発行した 1 コインっていうのは 1 ドルの、あるいは 1 円の価値がありますよって。その価値は、そうやって担保に相当するものっていうのをきちんと銀行システム、伝統的な金融システムの中に置いていますよと。だからその価値っていうのは安定的なんで、信じてくださいっていうシステム考えたわけですね。リブラもこのアイデアっていうのをやってますし、それよりも早くアメリカ、US ドルだと、テザーっていうのがある。いろんなステーブルコインっての登場してますけど。一番メジャーなのは、法定通貨を担保に使ったものですね。そうすると、それをやりとりすれば、価値が安定したもので、より決済コストも、それから時間も、早く、安く、便利に、いつでも使えるシステムなわけだね。こんなふうな発展の仕方をしてるわけです。

そこで出てきたのが、じゃあ中央銀行のマネーというのも、この新しい技術を使って出せばいいんじゃないのかというところで、中央銀行デジタルマネーっていうののアイデアが出てきたわけですね。まず、前提条件として、中央銀行が提供するマネーって何だ？ 二つしかないです。一つは現金。この現金は誰でも使えるように発行されてます。もちろん、1 人ずつに配ってやるってことはしてなくて、中央銀行は銀行や信用金庫、あるいは郵貯銀行に対して出して、それが口座を持っているかたがたに金融から引き落とされて、あるいは窓口で引き落とされてっていう、ディストリビューションのシステム使ってるんですけど、これが一つの丸。それからもう一つ、中央銀行が提供してるマネーがあって、預金なんですけれど、中銀当座預金ですね。ただ、これを提供してるのは、基本的には銀行や証券会社や信用金庫など金融機関のみですけど。そこだけが中央銀行に口座を持つことができるからこそ、中銀は銀行の銀行だって言われてるわけです。この二つであったと。

じゃあそれ以外のマネーっていうのは、誰が提供してるかと。これは金融機関が、民間の金融機関が、預金マネーとして提供してるわけですね。つまり、現代の金融システムにおいては、マネーシステムって2階層構造になっていた。中銀が、現金かあるいは預金を銀行に対して提供する。民間銀行に対して。民間銀行は、預金というマネーを企業、あるいは個人に対して提供するというわけですね。こういう2階層構造になっているからこそ、これが決済システムの階層構造の発生源になるわけですね。なぜかという、決済何で行うかっていうと、現金か、もしくは預金だったわけですね。規模がある程度大きくなると、預金が決済、主たる決済手段になるわけなので、預金がどこにあるかという、中央銀行が銀行に対して提供する中銀預金と、民間銀行が企業・個人に対して提供する預金なわけなので、そこが重要な決済手段になるわけですね。そうすると、その前のページでお話したような階層構造っていうのが、決済システムについても出てきているわけですね。これが伝統的なマネーでございました。

ところが、新しいデジタルマネーっていうのは、それ以外にいろんな、新しい技術によって、いろんな形をとって出せるようになってきた。じゃあどんな中央銀行マネーがあり得るのかっていうのを見ると、マネーって一体どんなふうに分類できるんでしょうねっていうのを四つの軸で分類してみた。これ、図表で見たほうがいいので、次のスライドで見ていただくと、四つの軸っていうのを、赤・青・緑・オレンジの(####@00:43:06)で示しています。まず赤いところから行くと、このマネーっていうのは、誰でも利用できますか。そうでなくて、一部の人ができますか、しか使えませんかっていうのが赤。それからデジタルですか、デジタルじゃない物理的な何かですかというのが青ですね。それから、中央銀行が発行してますか、あるいは民間銀行が発行してますか、あるいはひょっとしたら銀行以外が発行するマネーってのもあり得るかもしれないですね。それが緑。それからもう一つは、最後はトークン型ですか、トークンがちょっと難しいんですけど、トークンは価値を表象する、表す何か物理的なものなわけですね。じゃあトークンじゃないお金って何？って言ったら、預金口座ですね。預金口座は、コンピューターの中にある数字にすぎないわけなので、物理的なトークンというわけではないわけですね。ちょっとこのトークンが少し分かりにくいんですけど、こういう四つのコンセプトがある。

じゃあ伝統的なマネーである現金は、どこに位置するかと。まず、現金。場所、皆さん、現金の場所、見つけられたと思うんですけど、赤い枠の中に入ってますね。誰でも利用できる。そしてデジタルではない。そして中央銀行が発行すると。そして、これ、BISのレポートの定義なんですけど、現金はただの紙切れにすぎないけれど、そこに価値を表象されていて、みんながそれを信じることによって、お金として成立してるわけなので、トークン型だというふうに整理されてる。もう一つの伝統的なマネーっていうの、預金。左上のほうにあります。まず誰でも預金口座っていうのはほとんど作ることができる。そして、デジタルであると。そして民間銀行預金が発行なんで、中央銀行が発行する預金ではない。これ、普通の預金っていうイメージですね。そしてトークン型ではないので、

そこに位置するわけですよ。じゃあ中央銀行が銀行に対して提供する当座預金はどこに位置するかというと、真ん中の上の所にあつて、これは誰でも利用できるわけじゃない。銀行しか、金融機関にしか当座預金口座は与えません。そしてデジタルであるし、中央銀行が発行するし、トークン型ではないってとこで、そこに位置するわけです。

じゃあ中銀デジタルマネーと言われるものはどこに相当するかっていうと、ここに1番から3番に打ってるここが、中銀デジタルマネーだと。中央銀行の当座預金のことを指して、中銀デジタルマネーとは言わないんですね。それはもう大昔から出していたわけですね。日本銀行の場合ですと、日銀ネット、1988年に出して、そこで数字でコンピューターで管理してるみたい。その頃からそれはデジタルマネーであつた。じゃあ今、デジタルマネーと言われてるものは何かというと、丸1番、汎用目的の中央銀行口座。

これ、何かというと、スウェーデンが考えているものが、この丸1番に相当します。スウェーデン、何が今、起こっているかということ、ご存じのように、クレジットカードとSwishという電子マネー、あるいはクレジットカードが普及して、お店現金受け付けなくなっちゃった。現金をディストリビューションするのって、とてもコストがかかるわけですね。お店も扱うの大変だし。受付禁止にしてったら、どんどん現金っていうのが世の中で使えなくなつてしまった。それはそれでいいんですけど、一部、スマートフォン持てない、つまり、e マネー、デジタルマネーを持てない、電子マネー持てない人がいる。あるいは、銀行口座にアクセスできないっていう人もいます。そうすると、先進国であるにもかかわらず、デジタル・デバイトじゃなくて、キャッシュ・デバイトですね。現金にアクセスできない人。Swishとかクレジットカードを持てない人は、一体どうやって生活していけばいいんだと。現金を下ろそうにも、お店は受け付けないっていうし、ATMは町にはなくなって、隣町まで50キロ飛ばしていかないとATMありませんなんていうことも。そういう世界が本当に実現しちゃったわけですよ。そこでスウェーデン中銀は、しょうがないから、じゃあ自分がSuicaみたいなものを出すから。あるいは、みんなに中央銀行口座を提供してあげるから、それで中央銀行がキャッシュカードを出してあげるから。

この丸2番にあるほうが、汎用目的の中銀デジタルトークンっていうことなんですけど。これ、簡単に言えば、中央銀行がSuica出すっていうことですね。それを使って決済してくださいっていうのが丸2番。もう一つは、銀行にしか中央銀行っていうのは口座を与えてこなかったんですけど、これ、全国民に口座をあげますという、ちょっと考えると、とんでもない判断ですよ。中央銀行にね、日本だと、1億2000何百万人の人が口座を持ってるっていうですね。ただ、そんな荒唐無稽な話ではなくて、例えばSuicaの発行枚数って、7000万枚あるんですね。1億2000何百万に、あんまり変わらないんですよ。コンピューターの処理能力がどんどん上がってきたんで、1億人全員口座持つって、できなくはないだろうって、そういう世界になってきているんですね。スウェーデンの人口そんな多くないです。1000万とか、数千万の単位だったんで、Suicaの発行枚数よりはるかに少ないですよ。そうすると、全員口座を持たせるっていうの、そんなばかげた話じゃってなって

くるわけですね。これがスウェーデンでやろうとしている丸1番と丸2番。

じゃあ丸3番のところは何かと言うと、1番2番と違う、3番は、赤い線の外側にありますよね。つまり誰でも使うためのお金じゃない。誰が使うかって言うと、主に金融機関が使うことっていうのを想定しています。これ、実際に実験をやっているのは、カナダと、それからシンガポールですね。次のスライドの一番下の所には書いているんですけど、カナダとMASですね。これがやろうとしているのは、大手が金融機関っていうのは、銀行間の資金決済っていうのは、毎日毎日大量にやってるわけです。それは日本だって、日銀がやってる、行われてるわけです。ところが日銀ネットで決済する代わりに、日銀が提供する預金口座でお金を動かすのではなくて、中央銀行がトークンを出します。デジタルマネーを出します。それを使って、決済してください。ブロックチェーン上でトークンを出して、そのトークンをブロックチェーン上で動かして、決済すると。そういう新しいやり方っていうのも、実験っていうのをやってみてるわけです。これが、預金ではない、預金とコンセプトは似てるんですけど、預金という概念ではない、トークンというものを使った。トークンって、1種、現金のようなものなので、ですね。かつ、信用創造機能っていうものを持ってないものなので。そうした新しいものっていうのをつくってやり始めたっていうのが、テストし始めてるっていうのが、この3番になりますね。

要は、このページの1番から3番のところにありますように、結局中央銀行デジタル通貨って3類型あって、何の目的で誰に対して何を発行してるのかっていうの考えると、今の1、2、3っていうのがこれに相当すると。丸1は、リテールを含むいろんな目的で、幅広い主体に中央銀行預金口座を提供すると。丸2番は、同じリテール決済を含むいろんな目的のために、幅広い主体にデジタルトークンを発行するというわけですね。スウェーデンで出てきてる案は、Suicaと全く同じで、プラスチックの中にチップ埋め込んで、そのチップの中に、中央銀行デジタルマネーっていうの出そうというようなことを考えてる。丸3番っていうのは、大口決済での利用。主に金融機関の間での資金決済を目的として、その人たちだけに対してデジタルトークンを出すというような発想で出てきたわけです。っていうのが、今、出てきてる案でございます。

この中央銀行デジタルマネー、よく略して、CBDC、セントラル・バンク・デジタル・カネシーって言われるものですけど、これをめぐる議論っていうのが、この1、2年くらい非常に活発になってきてると。まず論点1なんですけど、何でそんなもんが必要なんですか、目的は一体何なんですかという話ですね。これ、スウェーデンは、現金がもう世の中から消えてなくなってるってますと。だから代替りのものが必要なんですよというのが、スウェーデン。

中国の事情はちょっとまた。中国もこのCBDC出しますって言ってるんですけど、ちょっと事情が変わっていて、中国、皆さんご存じのように、アリペイとWeChat Payっていうのが生活の基盤になってます。あれが中国の人たちの日々の生活を支えてるわけですね。ところがこれ、銀行ですらない。ただの普通の一般企業なわけですね。そこが、社

会的インフラっていうのを完全2社独占で持ってるわけですね。何かトラブルあって止まったらどうするんだよって、当局的には怖くてしょうがないわけですね。そんで、かつ規制対象でもない。もちろん流通業とかそういう形では、一般の企業としての規制はあるんですけど、金融機関じゃない。であるんだったら、代わりにもう中央銀行がデジタルマネーを出すよと。アリペイとかWeChat Pay と似たようなものっていうのを出すから、それを使ってくださいというふうにしたい。これが、実は中国が出した一番の事情でございます。もちろん、田舎のほうで誰でもお金が使えるように、銀行にアクセスできない人がいるから、その代わりのもを出しますとかですね。そういう理由っていうのもありますし、それからマネーロンダリングとか、本人確認、悪いことしないようにって、そういう犯罪コントロールとか、情報の収集とかいうもあるんですけど、一番大きいのは最初に言った事情で。

ただ、他の先進国においては、全然そんなの当てはまらないわけですね。例えば日本において、中央銀行デジタルマネー要りますかって言っても、みんな、なんですか、それ？と。何とかペイがあるから、クレジットカードがあるから、全然要りません。あるいは日本って現金の物流制度がものすごく整えられていて、ATM なんか、200 メートルも歩かないうちに、何台もあるわけですね、コンビニエンスストア、銀行って。しかも夜中でも、コンビニエンスストアなんか動いていると。要らんでしょうということですね。というのがほとんどの先進国の事情です。ところがやっぱりリテール・キャッシュレス決済みたいな人たちが出てきて、そこが高コストになっている。あるいは、海外送金をやろうとすると、きょう出てきたコルレス・バンキングの中で、非常に高い料金がそのまま残っていると。そういう既存の決済インフラの改善をやるほうが先でしょうっていうような議論っていうのが、主流でございます。

それからもう一つは、民間の金融機関とか決済事業者がやってるのを横取りするのって意味ないでしょうと。それから、ビジネスやるんだったら、官がやるんじゃなくて民がやったほうがいいに違いがないですかと。そっちがうまくできるし、競争しながら、切磋琢磨しながら、そういう人たちがいいサービスを提供していくほうがいいですよっていう話ですね。

それから、論点1の一番下のポチなんですけれど、これ、リブラのアイデアが出てきたときに、マネーって一体誰が出せるんでしょうかというのが、非常に議論になってるわけですね。出すことが、法定通貨とリンクさせれば、法定通貨の価値にひもづけた通貨っていうの出すことができるんですけど。技術的に出せるんだったら、出していいんでしょうかっていうのって、すごく難しいわけですね。例えば、非常に経済力が弱いような途上国のところで、ドルが使えるんだったら、みんなドルが使いたいと。ベネズエラの人は思ってるわけですね。ハイパーインフラで苦しんで、自分の国の通貨なんか持ってたなら、あっという間に紙切れになるから。そういうときに、リブラみたいなものが出てきたら、みんな自分の国の通貨放棄して、当然あっという間に、ドル経済になっちゃうわけですね。

カンボジアはドル経済になっちゃいました。内戦のときに、国連軍が来て、現地で調達したものをどんどんドルで払っていったら、ですね。カンボジアの銀行のバランスシートの9割はドルですね。買い物も、みんなほとんどドルで行われてるわけですね。そうなるのととても悲しいのは、金融政策が全く効かないですね。なぜかって、ドルで動いてるから、金利はドルだ。カンボジアの金融政策は誰が決めてるんだ。FRBが決めてるわけですよ。という、何ていうんですか、通貨のコントロール権っていうのをなくしちゃうと、これ、国家主権の問題なんですよ。技術的にできるからやっていいのかっていうと、そこはやっぱり疑問があるでしょう。これは、後半、松元さんのほうがハイエクの話をするので、そこでもう一度出てくる話だと思います。

それから論点2。副次的な効果がやっぱり大きいでしょう。中銀デジタルマネーなんか出したら、民間金融機関から預金がドバッと流れてくるでしょう。金融システムに構造変化が生じるかもしれないですよ。あるいはそれが金融政策、銀行のバランスシートが変わるから、金融政策に影響を及ぼすかもしれないですよ。それからデータを集める。個人のデータを集めて、マーケティングに活用しようっていうことを一生懸命何とかペイとかの人たちがやってるのに、それを取り上げるって、中央銀行が個人の買い物の記録とかを持ったって、無駄でしょう。別に、そんなもん、使いたいし見たいわけでもないわけなんですよ。中国は違うかもしれませんがですね。という事情があるので、やっぱり何か今のところCBDCって、問題含みだよねってことだったんですけど。2日前のニュースであるように、まだ何が起こるか分からないけど、技術的な研究はしますっていうことで研究会がスタートしてるっていう状況です。

それから最後、ちょっと駆け足になりますけれど、キャッシュレス決済にもう一回戻って、キャッシュレス決済の業務っていうのは、もう決済に全然すぎない。決済ではないところの勝負になってきているっていうことをお話をしたいと思います。31ページのところに、何とかペイっていうサービス事業者一覧ってあります。ズラッと並べました。そして、その親企業っていうのを並べました。その人たちのメインビジネスが何かっていうのを並べました。みんな共通した特徴があります。とてもビッグビジネスであって、そして顧客を大量に抱えているという、一種のプラットフォーマーですよ。そういう人たちが続々とここのビジネスに参入してきていると。どうしてかってことですね。一つは、データを集めたいから。例えば、エレクトリック・コマース、楽天ですね。楽天でいろんな商品検索したり、買い物した結果っていうのは、全部記録取られてます。これ、Amazonも同じですよ。そうすると、その決済購買閲覧データを入手することによって、それをマーケティングに活用してくことができるでしょう。それも一つの目的でございます。

それから、実はクロスプラットフォーム、そういういろんな他のビジネスに応用していきたいっていうのは、ものすごく広範に行われていて、これ、横軸、一番上に、横にグループ別に、Yahoo!、LINE、楽天、メルカリ、KDDI、ドコモ、イオン、JR、トヨタっていうふうにダーッと並べてます。それが決済サービスを起点に、どんなサービスを横展開して

るのかというのを下のほうにやっています。ものすごいいっぱい横展開してるわけですね。何でかっていうと、あらゆる経済行為って、お金の支払いが伴います。そうすると決済サービスを提供すると、EC も、あるいは実店舗も、通信キャリアも、コンテンツも、金融サービスも、全部お金を起点としたところで、カスタマーにアクセスするフックになるわけですね。自分が抱えてる本業のところのお客さんに対して決済サービスを使って、便利だねっていうだけではなくて、他の自分が横展開してるサービスのところに、その何とかペイ使おうと、使えますよ。しかも有利に使えますよっていうので、こんだけいろいろ横展開していきたい。そういうクロスプラットフォーム戦略っていうのを、どこも今、一生懸命展開してってるわけですね。

そうやって、横展開をすると、何が出てくるかという、スーパー・プラットフォームっていうのが、最近アリペイのようなアプリで言われてるんですけど。この絵、何を意味してるかっていうと、一つずつのプラットフォームだと、ユーザーとサービス提供企業つながりだけです。ところがこのユーザープール、巨大な、例えばLINE だと 7000 万人会員がいるわけなんで、これを押さえると、そのユーザーを違うサービスのところに、違うプラットフォームを提供して、引っ張っていくことができる。ここでは四つのサービスがあるんですけど。そして、そのサービス・プラットフォームの全体を 1 個のプラットフォームに載せてしまえば、これがスーパー・プラットフォームなんだということですね。中国で発展してるのは、アリペイのアプリのところに行くと、ミニアプリがいっぱい並んで、ミニアプリが提供するサービスのところに誘導していくことができる。

このマーケットの特徴っていうのは、2sided-market と言われるものであって、何が 2 サイドかという、このプラットフォームは、ユーザーとサービス提供者をつなぐ場になっている。ユーザーを開拓しなきゃいけないし、サービス提供者を開拓しなきゃいけない。典型例が一番下を書いてある、クレジットカード・キャッシュレス決済事業者であって、まず、キャッシュレス決済、何とかペイを使ってくれる人、使う利用者を、カードを利用する人、クレジットカードを利用する人を増やさなきゃいけないし、それを使う加盟店も増やさなきゃいけない。そんなマーケットって、実はいっぱいあります。

例えばコンピューターの OS ですね。コンピューターを買う人と、その OS の上で動くソフトウェア、エクセルとかですね、そういったものを開発する人が、その関係にありますし。ゲームもそうですね。利用する人と、そのゲーム機で、ゲームの中身を提供する、開発業者ですね。それから新聞もそうですね。新聞・雑誌も、広告を載せるためのプラットフォームだっていうふうに考えれば、なぜ雑誌があんな安く提供できるのか。雑誌売ることによってもうかってなくて、広告料でほとんどもうけてるわけですね。それから小売りのモール店、イオンモールとかそういうところがいっぱいあるんですけど。あそこもそう、小売店をそこの中に並べるということによって、消費者と小売店をつなぐプラットフォームになってるわけです。

こうしたものの、2sided-market っていわれるものには特徴があります。何かというと、

ユーザー側の価格弾性値が非常に高い場合ってというのは、ユーザー側への価格チャージを抑制する。例えば、モールに入るときに、入場料無料ですよ。駐車場だって、無料なところが多いわけですよ。そうすると、お客さんがたくさん集まる。お客さんがたくさん集まると何がいいかっていうと、テナント料引き上げることができるわけですよ。このモールはとても集客力があるモールなので、テナント料高く設定して、そっちでもうけることができるようになりますよね。あるいは、ゲーム機もそうです。あんまりゲーム機で本体でもうけるわけではなくて、ひょっとしたら、採算割れで、あるいは採算トントンくらいで販売して、そっちはもうからないけれど、そのゲーム機で動くゲームを生産する人からライセンス料取って、そっちでしっかりもうけると。ということが起こるわけですね。とにかくユーザーを増やせば、そっちから獲得できるんだと。

キャッシュレス決済も同じことが起こっていて、ユーザーは無料どころか、ポイント・バックが発生してるわけですね。2 パーセントも 3 パーセントも、ポイント・バックしてくれて、これ、誰負担してるかっていうと、お店がもちろん加盟店手数料で負担はしてるんですけど、持ち出しになってると。大体何とかペイってところの決算見ると、もう赤字ですね。真っ赤っ赤のですね。100 億キャンペーンってやってれば、きっちり 100 億円以上の赤が出るわけです。

じゃあそういう人たちの手数料構造、収益構造がどうなってるかという、収入って結局加盟店手数料しかないわけです。売り上げの X パーセント。3 パーセント、5 パーセント。それくらいを払ってくださいと。実際に売り上げたお金が 100 円だったとしたら、100 円を払い込みませんよ。そこから手数料 3 パーセント引いた、97 円だけ 1 カ月後に払い込みますからね。それが、その 3 円が収益源になってるわけですね。

一方でコストはいろいろかかっていると。まず銀行を使うので、銀行の決済手数料払わなきゃいけない。それからお店に対して、お店開拓したり、お店に入金したりしてあげる、そういうアクワイアラですね。アクワイアリングやってる人に手数料払わなきゃいけない。それから何より最近負担が大きいのは、利用者へのポイント還元をしているわけですね。このポイント還元のお金どっから出てくるかっていうと、加盟店手数料しかないわけですね。原理的には。ところが、ここでものすごいキャンペーンをやってるんで、収益が真っ赤っ赤になるわけですよ。何で、でもそんだけやってるかっていうと、やっぱりユーザーのほうにとことん安く価格設定をして、あるいは赤字を出してますよってすることによって、反対側のマーケット、つまり加盟店ですね、をたくさん集めることができるわけです。そうすると、トータルではもうかるから、2sided-market の特徴は、一方でユーザー側で赤字出しても、店舗側のほうでしっかりもうけることができるというようなことが起こってるわけですね。

最後はすみません。ちょっと決済の話から外れましたけれど、まとめますと、今、起こってることってというのは、マネーの概念、例えばどんどん拡大・変化してきていると。新しいマネーが出てきたので、決済サービスの市場構造ってというのが非常に大きく変化して

きていると。これ、ひょっとすると、金融システムの構造にも影響を及ぼしてくる可能性があるかもしれない。それから最後にお話ししたプラットフォーム・ビジネスっていうのがどんどん進化してきていて、ここに新しいマーケットがあるんじゃないかと思って、みんないろんなことをやり出して、エコシステムの構築であるとか、そういうことを思っているということで。これがこの後、もっと速いスピードでどんどん形が変わってくるので、また、1年後話したときには、ひょっとすると、さらにここに付け加えることが増えてきているのかもしれませんが。いうところで、私の話は終わりにします。ご清聴ありがとうございました。

藤山 はい。副島先生、ありがとうございました。いや、目の前に起こっていることが、こういうことだったのかっていうのを、何回か、目からうろこが落ちるっていう気持ちがありました。大変面白かったと思います。それでは、次に、引き続き松元先生にお話をさせていただきたいと思います。松元先生は、ご存じの方多いかもしれませんが、元内閣府事務次官であります。その前、財務省で、ほとんど財務省のいろんな仕事をされてたんですけども、財務省の主計局次長、熊本県企画開発部長、それから、そんなことをやられた後、退官後は第一生命の経済研究所の特別顧問、三菱マテリアルの取締役を経て、現在は国家公務員共済組合の、組合連合の連合会の理事長であります。

私とは数年前、もう10年近く前ですかね。官民の交流の組織で会ったんですけども、お話をして、こんだけ賢い人は見たことないなって思ったことが、私は何回もありまして、それ以降、一緒に座禅をしたりとか、そんなことをしております。そもそも、このフィンテックであるとか、この金融市場の未来の話を誰かにしてもらおうというときに、誰にしてもらったらいいのか、全然見当もつかないし、学者さんにもそういう適当な方、なかなかいらっしゃらないという感じがしたので、松元先生のところに行って相談をしたところ、それじゃ僕が探してみるつって探していただいて、それで、松元先生にもお話をいただけるということになったので、大変きょうは楽しみだというふうに思ってるわけです。

松元先生のお話は、歴史に学ぶマネーの本質、ハイエクの貨幣発行自由化論というお話だそうです。課題図書を読まれたかと思うんですけども、非常に、私も、実は今度初めて読んだんですけども、非常に戦前・戦後のストーリーが描かれてる様が面白くて、非常に勉強になったわけですけども。きょうは、今の貨幣のところっていうところの裏にある、いろんな哲学的な論争みたいなことも、もしかすると出てくるのかなと思っているわけですけども。早速、『歴史に学ぶマネーの本質』という題でお話をいただきたいと思います。それでは、よろしく願いいたします。

松元 松元でございます。よろしく願いいたします。今、副島先生のほうから、マネー、ネオマネーの最前線のお話をいただきましたけれど。まさに、お聞きになっていただいております。いろいろ新しい新しいニュービジネスが出てきてる。という

のは、マネーっていうのが、やっぱり固定的に考えてるといけない。ヤップ島の話ありましたけれども。そういう時代からマネーっていう考え方っていうか、概念っていうか、道具。そういうものが実はあった。いうことで。その辺は、例えば中央銀行があるの、今、当たり前になってますけれども。人類の歴史の中で、中央銀行って、比較的新しいんですね。中央銀行がなかった時代のほうがずっと長かった。私なんて、1枚紙なんであれですかね。お手元のやつだけご覧いただければいいですかね。

ハイエクっていう人が、貨幣発行自由化論。中央銀行なんかなくたっていいんだと、こういうことを言ってたということで、当時としては、とんでもないという人が多かったんですが、実はハイエクは、第2次世界大戦、非常に悲惨な世界大戦、何で起こったんだろうか。やっぱり自由主義がなくなったからだというのが、彼の原点です。その一つの理由が、各国の中央銀行が通貨の発行を独占している状況下で、政府の財政規律が保たれなくなって、インフレになって、経済がかく乱されるんだと。それは独裁国家による、自由抑圧の道具になって、平和を脅かすんだと。これがハイエクの一番の基本的な発想です。そういう発想から、大体中央銀行みたいなやつは、独裁者が道具にしちゃうから、こういうことになるんだ。略して言うと、きょうの副島先生のお話からも、巨大プラットフォームが出てきたら、とんでもないことになるよっていうのと、実は同じようなこと言ってる、考えた、お考えいただければいいのかなとも思います。

ハイエクが考えた、じゃあ通貨っていうのはどういうものかっていうと、リブラみたいなもんです。リブラは、ドルとかそういう先進国の通貨をバスケットにして、それでもってステーブルコイン作りましょうと。ステーブルマネーを作りましょうということですが、ハイエクが考えたのは、民間銀行が一定のバスケットと等価である、これを保証する通貨を各民間銀行が発行する。その中で、一番ステーブルなやつが、競争の中で勝ち残っていくと。そうすると、みんながそれを使うようになれば、世界中がそれを使うようになれば、実は国際(####@01:11:13)問題もなくなるんだということを彼は考えた。そうだとすると、中央銀行要りませんから、中央銀行はなくなると。中央銀行なくなると、金融政策がなくなっちゃっていいのかと。ハイエクは、そもそもあれなんですよ。金融政策なんか必要ないんだということを言っております。というのは、そもそも適正通貨量なんていうのは、誰にも分からないんだから、そんなもんは決められるわけではないんだ。インフラに対する反省から、そういうことを言ってたということで、一つの思想の座標軸としては面白い考え方かな。

中央銀行っていうのが、そう昔からあったわけじゃないということで申し上げましたが、ハイエクが言ってた、いろんな主体が通貨を発行してたということが、ここからはおさらいになりますが、この、私が課題図書でお願いした、私の本の中に書いてあることですが、アメリカ合衆国の南北戦争までは、実はそうだったんですね。州法銀行がそれぞれ、この通貨を発行してたということで、数百種類もの通貨が発行されてた。アメリカ合衆国1国です。南北戦争までのアメリカっていうのは、人口が4000万もいないくらい

ですから、そんな大して大きい国でもなかった。今の感覚からすれば。当時としては大きいですけども。そういった銀行がいっぱい通貨を発行してた。うまくいったかっていうと、必ずしもうまくいってなかった。山猫銀行とか、詐欺みたいな銀行がいっぱい出てきたということですので、必ずしもうまくいってませんでした、しかし、そういったこのたくさんの金融機関が通貨を発行してたという仕組みを持っている。

実は、今のアメリカの金融システムも、そのへその緒を引っ張ってるってところがあります。これは、時間があればっていうか、本の中にも書いておきましたので、ご覧いただければと思いますが、明治の初年、実は日本はアメリカの制度をまねしました。しかしながら、うまくいかなかったっていう歴史を持っています。金融政策がどうだこうだっていうお話を最初しましたけれども。ハイエクはそんなもんなくてもいいよと、こう言ったんですが。金融政策がある・なしにかかわらず、やはり安定した金融制度っていうのがないと、この経済っていうのがしっかり発展しないというのを、実は日本の歴史というのは、表してます。というのは、明治維新になって、日本がどんどん発展したと思ってる人がいますけれども、そんなことはありません。明治維新になって、しばらくしてから、日本銀行ができて、日本が通貨制度を安定させる、今の日本銀行券が発行されるようになって、金融制度が安定してから、明治 20 年頃から、日本の経済というのは発展し出してます。やっぱり金融が不安定だと、投機が起こって、経済は発展しない。それを一番言ってたのが、高橋是清であります。

じゃあ日本のそれまでの通貨制度はどうだったかという、実は日本の通貨制度は、明治維新に、のときに、ハリスっていうアメリカの公使が、とんでもない為替レートを日本に押し付けたんで、金が流出して大混乱して、その結果として日本経済がしばらく低迷するということになってますが。それ以前の江戸時代の日本の通貨制度っていうのは、非常にうまく機能していた。ここからもおさらいになりますけれども。江戸時代の日本の通貨制度っていうのは、今日の国際通貨制度のようなもので、幕府が金貨・銀貨・大判・小判、それから(###@01:15:18)とかそういうのを発行してますけれども。各藩が藩札を出してたということですので。ですから、アメリカ合衆国で、たくさんの通貨が発行されてたと同じような状態が日本の国内にあった。それと同時に日本の国内では、両替屋というのが非常に発達してました。それで、両替屋が各藩札の間での交換業務、それから荷為替みたいな、あとは送金ですね。こういう為替というのをやってたということで、これで非常にうまく機能をしていたと。かつ、江戸時代の金貨・銀貨っていうのは、途中で吹替、品を落したりして、貨幣の量を増やしたりってことをしてます。金貨・銀貨も、ある意味で管理通貨的な話があったと。

それともう一つ。ヤップ島の大きな石が貨幣だって、信用だっていう話がありましたけれども。大坂、江戸の金遣い、大坂の銀遣いと言って、大坂はそもそも金貨あんまり流通してなかったんですが、そもそも銀貨がそんなには流通してなかったっていうか、大坂の商人間の決済は 99 パーセントが手形で決済されます。この手形というのは、要するに商人が

振り出した手形の、要するに信用ですね。貸借。副島先生の話にもありましたけれども、通貨というのは結局は信用の貸し借り、決済なんです。手形っていうのは、何か物を売った、その見返りに、何月何日までに払いますよ。これが一遍振り出された手形が、決済されずに、転々流通して、回り手形と言ったんだそうですけれど。通貨と同じ役割を果たしていた。別に、政府じゃなくても、銀行じゃなくても、信用がある商人が振り出した手形は、まさに通貨として役割を果たす。大坂、天下の台所と言われた大坂の決済システム。これは手形という口座と。要するに口座って、要するにそれ、記帳はされてりゃいいわけですね。ヤップ島のその貸借の記録が頭の中だったかどうか。この江戸時代の大坂の場合は、商人が振り出した手形。これで回り手形という形で、決済がされてた。

両替商の中には、やがて空手形を出すところも出てきたと。1万両の資本で、6万両、7万両の空手形を出す。それでも、信用のある人が出した、商人が出した空手形であれば、ずっと回り回って、決済されなきゃ、要するに決済されるってことは、取り付け騒ぎが起これなければ、1万両の資本で6万両、7万両出しててもいいという形で、極めて安定的に運用されてたのが、江戸時代の天下の台所の姿。それでもって、江戸時代っていうのは、非常に経済的にもステイブルに発展していった。人口も江戸時代になれば倍くらいになってます。それで、経済規模も倍以上になってる。実は、同じ時期の朝鮮、李朝朝鮮は、経済ほとんど停滞です。人口むしろ減ったとかって言われている。

いずれにしても、そんな信用の社会だったというのが一番よく分かるのが、落語を聞きに行かれるとよく分かると思います。落語の中にいろんな話がありますが、まず借金取りがやってくると。それでもって、この借金取りをいかにごまかすか。長屋のハチさんが逃げ回る、居留守を使う、帰ってくれと(#####@01:19:30)。さあ、どうやってごまかそう。除夜の鐘が鳴ると、借金取りも来なくなって、さあまた来年だ。この話が表してるのは、この長屋のそういった普通の人の生活っていうのが、信用、クレジット。まず一括払いだったかどうか、さすがに数カ月置きくらいに大福帳持ってきて、借金取りっていうか、大福の回収来たような気はしますが。しかしながら、落語にそういう話があるってことは、それが普通の話だった、ということだと思います。

それから江戸時代の話で言えば、江戸っ子は宵越しの金は持たないというのが、江戸っ子だったっていう話があります。これはキャッシュレス社会だったら、成り立つ。宵越しの金を持たなくても、次の日からつけ払いというか、要は今度稼ぎ入ったら払うからねというんで、それで生活が成り立つ。大きな金が入ったら、借金払ったら、あとはうまいもん食って、酒飲んで寝ちゃう。江戸っ子は。それで自分だけじゃなくて、周りの人にも振る舞う。こういう感覚だと思いますが、宵越しの金は持たないというのが、カッコいい江戸っ子とされてたっていうことは、みんながそうやってたわけじゃないでしょうけど、だからカッコいいお兄さんがそうやったから、そうなんで、珍しいケースではあったかと思いますが、そういうふうになり立ってたのが、江戸のキャッシュレス社会、信用社会で。貨幣っていうのは、そういう信用だと。こういうことだろうと思います。

その江戸の信用社会が、先ほど申し上げた、ハリスがとんでもない為替レート押し付けたもんですから、大変なインフレになって、混乱する。それを、それでアメリカのまねして何とか収めようとしたけど、うまくいかなかったっていうのは、アメリカ自体がそれほどうまくいってなかったんだと思います。ですから南北戦争の後、(#####@01:21:49)が出てきて、定着していったということだと思います。いずれにしても、そういう歴史がある。それで、明治時代、うまくいかないと、経済も発展しない。それが松方正義が出てきて、松方デフレと言われますけれども、しっかりインフレを抑え込んで、日本銀行店を出して、それでもって安定して、経済成長が始まったということでもあります。

ここでハイエクに話を戻しますが、ステーブルコインっていう話がありましたけれども、やっぱり為替は安定してたわけです。通貨価値っていうのは、安定してたほうがいい。ハイエクは実はもともと固定相場論者です。高橋是清も固定相場論者です。金解禁をやったんで、変動相場論者と思ってる方が多いんですが、そんなことはないです。高橋是清は、(***ジウキンザン@01:22:45)の金を重視するジウキンザンの(****ダイソウジョウ@01:22:50)と言われた人です。それは、商をやっておられて、固定相場のほうが為替差損とか差益とか心配せずに商売できるわけですから、非常に商売しやすい。当り前の話です。しかしながら、それぞれの国の経済実態が一樣でないですから、固定相場を続けていくと無理が出てくる。結局世界としては、経済運営に違いがある以上は、変動相場制にならざるを得ない。金融政策(#####@01:23:24)という話だと思います。

そういうことで、現代の社会では、基軸通貨というのがあります。ドルです。基軸通貨として、ドルがやはりこれは押しも押されぬという形で、基軸通貨があります。江戸時代の日本の感覚で行くと、大判・小判、幕府が出してた大判・小判が今日のドルに相当するとお考えいただくと、分かりやすいのかなと思います。面白いのは、江戸幕府っていうのは、各藩には藩札出していいよと言いながら、自分のところは藩札出してないんですね。藩札だったら、印刷すりやすぐですけど、金貨・銀貨・大判・小判だと、吹替をしなくちゃいけない。しかも吹替して、偽造が出ないように、結構細かい模様、日本銀行の貨幣博物館行くとありますけどね。そういった(#####@01:24:22)。基軸通貨ということが、恐らくは本能的に分かった。一応、徳川家康の(#####@01:24:34)だっていうことで出してなかったわけです。結果としては、それが非常に江戸時代の経済の安定性というのを守ってた。あともう一つは、要するに武士たちに何石取りとか、米で支給してましたから、米中心の経済っていうのは、建前としては、そっちのほうがあったのかなという気はしますけどね。いずれにしても、似てるということ。ドルの基軸通貨とよく似てるといえば、似てる。

そういう中で、リブラのようなネオマネーが出てきて、便利だからってみんな使うようになったら、これが基軸通貨になり得るかという、頭の体操です。それについては、私は無理ではないのかなと思っています。というのは、基軸通貨の背景に、アメリカのドルの背景には、やっぱりアメリカの治安維持能力というのがある。江戸幕府の金貨・銀貨、途

中で改定されて、管理通貨になってます。実質上は。しかしながら、それが基軸通貨であり続けられたのは、やっぱり江戸幕府の治安維持能力というのがあったってことだと思います。貨幣は信用ですから、信用、最終的な信用ってというのは、やっぱりこの治安維持能力ってというのがないと、最終的な信用というのが担保されない。ネオマネーというのは、ドルとかそういうのに(#####@01:26:15)してるっていうか、バスケットでやりますから、それとあんまり離れないっていうことで、それなりの信用はするかもしれませんが、ネオマネーの背景には、そのような治安維持能力はないということで、ドルに代わる基軸通貨には、私はなり得ないというふうに思っております。

しかしながら、いろんなビジネスモデル出てきてますよということで、副島さんのお話にもありましたけれども、便利な道具という意味では、これからどんどんその利用が広がってくる可能性がある。ただ、現金っていうのも、結構やっぱり使い勝手はいいんで、これはやはり、お金を何に使うかっていったら、情報の固まりみたいなのに、それを欲しいからみんなやるわけですけど。逆にいうと、個人から行くと、どこで何にどれだけお金を使って、いつとか、これプライバシーの固まりみたいなもんですよね。脱税するのは、やっぱり現金じゃないと、お札を庭に埋めとくのが一番です。誰にも言わなきゃ。ところが大体しゃべっちゃうと、誰かがそういうこと言うと、税務署が来てますね。お宅の庭のあそこおかしいんですけど、何かした？とか。そういうことが起こったりしますが。そういうのがなければ、現金はたんす預金にしちゃうと。ですからそういうのが伝わると、強盗が入ったりとか、変なことになります。そうでなければプライバシー守られるのが現金です。

人間やっぱりあんまり人に知られたくない話っていっぱいありますから、何でもかんでも電子通貨になって、電子通貨じゃなきゃ何もできません。なんていう、そういう社会には、私は少なくとも生活したくない。別に貧乏人が持てないと思ってるんじゃないくて、お金持ちでもそういう欲求はあるんじゃないのかなという気がいたします。そんなことで、ネオマネーが全部変わっちゃうってことはないけど、便利ですから、いろいろ使えるということにはなるんじゃないのかと。

金融政策の有効性をそいでしまうとかっていう話がありましたけど、この辺はまたいろいろ議論がある。副島さんからいろいろ伺いできればいいと。ただ、基軸通貨にはなりませんが、やっぱり中央銀行もそれと競争してっていうか、ある意味弊害防止の観点からも、デジタルマネーを出していくことが十分考えられる。日本、やるかやらないかは別として。他の国でもやるところ、いろいろ出てくる。そうすると、ネオマネーの群雄割拠という、そういう中でいろんなビジネスモデル、サービスが展開される。ある意味でいうと、南北戦争前のアメリカの状況、あるいは江戸時代の日本の状況、江戸時代のわが国の状況ですね。そういう状況になるというふうにお考えいただいていいのかなという気がします。

お配りした資料のほう、貨幣発行自由化論のハイエクの貨幣の定義を、最初出してます

が、貨幣は、その量を統制することによって、特定の予測可能な結果を達成することのできる政策手段ではない。これは、中央銀行なんかなくてもいいよっていうこと、ここは言ってるんですけどね。そこから後ろですが、状況についての情報を価格という抽象的な信号によってのみ得ている各個人が、それぞれの行動を状況に常に適応させることができる自動的機構の一部なのである。学者の先生の文章なので、なかなかこれだけ読んでも、何言ってるの？という感じかもしれませんが。要するに、自動的機構、これ、マーケットのことです。マーケットの中で、価格という状況についての情報を抽象的な信号で各個人が得てる。これを状況に適応させる。副島先生の話で、2sided-market、それぞれをマッチングしてってというような話がありましたけれども。言ってることは、要するに信用をつないで、それでもって、経済がうまく回るようにする。そのところが安定した仕組みになってないと、経済は発展しませんよという。ハイエク流の経済学的にいうと、こういう言い方になるのかなと。それが発行自由論の中に出てくるという意味ですけど。

マネーの定義で、M1、M2、M3 って下にありますがけれども、これは、貨幣がどういう形でいうのを観察して、統計として、政策手段として使うときに、(####@01:31:26)する必要から、こういう形になってると思いますから。しかしながら、そもそも口座みたいな、要するに信用というのがどこに記録されてるかっていうことで、ヤップ島だとかかっていう話ありましたけども。江戸時代の回り手形の感覚からいくと、手形という媒体で、そういう信用が記録されて。別に銀行口座じゃなくてもいいわけですね。貨幣の信用が記録されてれば。

それでもって、去年の暮れに出た、日本経済研究センター『2060 デジタル資本主義』っていう本があるんです。そこが将来どうなるかなと。2060 年にどうなってるかっていうのを、日経センターが出した予想ですけども。金融機関の支店や ATM は、携帯電話の普及でほとんど見かけなくなった公衆電話のようになくなる。今、公衆電話ってないでしょう。みんな携帯電話しか持ってない。金融機関の支店とか ATM っていうのは、昔の公衆電話みたいな感じになって、もうみんななくなりますよと。2060 年には通貨がデジタル化し、マイナンバーにひもづいた形で個人の金融資産が管理され、銀行口座はなくなっている。金融機関は IT をフル活用し、個人の信用度をスコアリングし、資金を借りたい人とか貸したい人が直接金融で資金を融通する仲立ちをしているだろうということです。

先ほど申し上げたように、私は、中央銀行っていうのは、(####@01:33:01)金融機関発行とか、いろんなことをやってる。これの役割っていうのは、なくなることはない。ですから、中央銀行はなくならないと思ってます。中央銀行がない世界っていうのも、もちろん想定することはできますけれども。しかしながら、個別の商業銀行は、この日経センターのこれによると、銀行口座がなくなってる。銀行口座持っていない金融機関って何なの？ 新しいニュービジネスということで、いろんなビジネスが展開されますよっていうお話が、先ほど副島先生のほうからありましたけれども。商業銀行の業務は大変な、激変がこれから予想されるんじゃないか。

M1、M2、M3 それぞれ、定義がここにありますが、要するに現金以外は預金通貨ですよ。預金口座がなくなるってことは、M1 も M2 も M3 も、およそ、全然定義が違ってきてしまう。ですから、ハイエクの上のほうに、定義がありますけれども。貨幣は何だろうか。それぞれの状況に常に適応させることができる自動的機構の一部。要は、これ何言ってるかっていうと、通貨、貨幣っていうのは、要は道具なんだと。はさみとかのりといった商売道具と同じだと。ですからそういった商売道具、使い勝手がいいように、使えればいいんで、別にそんなもんを、ハイエクの場合ですよ、中央銀行がしゃしゃり出てきて、はさみは私が作ったこれでやりなさいつつて言わなくたっていいでしょうと。ハイエクはそう言っていると。こういうわけであります。

ということで、中央銀行はなくならないにしても、商業銀行の仕事っていうのは激変するだろう。これは、江戸時代、大坂の 99 パーセントの取引が商人間の手形で行われてたってことは、まさに江戸時代の大坂には、銀行なんかない、口座なんかない。しかしながら、その代わりが手形というものが、口座の代わりをしていた。ですから、ニューマネー、デジタルマネーの、デジタルの中での記録というか、記録ですね。これが、大坂の回り手形の代わりをする。それを要するに便利に使うという形で、いろんなことが行われるようになる。いうことの。ですから、これから一体どういう形の金融サービスが出てくるのか、貨幣がどういう形になってくるのか。あんまり予断を持って考えないほうがいい。

高橋是清は、井上準之助の金解禁っていうのは、当時は、金本位制がいいに決まってると思うわれてたわけで、井上準之助は金本位制に無理やり戻したわけですね。高橋是清も、金本位制論者ですから、そのこと自体はいいけれども、関東大震災で、実は GDP の 3 分の 1 が失われた。そういう大被害を被った後の日本経済の実力は大変落ちてくる。そのときに、旧平価で、井上準之助は金本位制に戻した。それに、高橋是清は大反対だったんですね。井上準之助はそういったって、デフレ政策やって、経済を通貨の価値に、同じようにしてやれば、そこから伸びるためには、きょうしゃがむと。高く跳びたければ、深くしゃがまなくちゃいけないと。だから、旧平価で金解禁してもいいんだと、こう言って、金解禁をしたんですけれど。経済、生き物ですから、世の中そうはいかない。要するに旧平価っていうのは、ハリスが押し付けたとんでもない為替レートと同じだということを、高橋是清は考えてたんだと思いますね。明示的にそう書いてはいませんが。

高橋是清が常に言っていたのは、「学問は大事だけれども、学問の奴隷になってはいけない」。横浜商科大学の卒業式のときに、「諸君は、学校で学んだこと、しっかり踏まえてもらいたい。しかしながら、学問の奴隷になってはいけない。要するに理論だけっていうよりも、現実というのをよく見て、それでもって判断する人間になってくれ」ということを高橋是清は言っていました。時代というのは変わっていて、理論というのはある時代時代に適合されても、現実が変わってくると、理論っていうのはそこにうまく適合しなくなるということがありますから、うまくその理論が合わないときは、ちょっと白紙に戻して考えてみる。特に、技術革新というか、技術の進歩が非常に速い、大きいときっていうのがあります。

すね。そういう心構えが必要なんではないか。この辺のことは、実は、今道友信っていう人が『エコエティカ』ってことの中で書いてる話も、私がそれに通じるんじゃないかと思ってますけど。その話は、きょうはしません。

私、大体 30 分ということで、時間いただきました。ニューマネーといっても、マネーの本質は変わらないとは思いますが、マネーの本質そのものが、今、皆さんが思ってるようなものでは必ずしもない。そういう中で、新しい技術が出てくれば、新しいサービスが出てくる。それに伴って、新しいビジネスモデル、新しいビジネス(###@01:38:52)しかしながら、そのビジネスモデルっていうのが、独占というか、社会を抑圧するようなものになってはいけない。ハイエクが考えてたのは、貨幣というか、要するに通貨っていうのは、非常に人間生活の根本的なものだから、それを抑圧するようなシステムにしてはいけないということです。それが、ハイエクの場合は、中央銀行がそれになり得るから、そんなもんやめちまえと言ったわけですが、必ずしも中央銀行じゃなくて、そうじゃない主体がそういうことになるということも考えられるのかな。そういうことも考えなくてはいけないのではないかな。日本銀行において、そういったこともお考えになってるのではないかと思います。よろしくお願いします。以上でございます。

藤山 はい。ありがとうございました。ネオマネーの話も、江戸時代や明治時代の、あるいは戦前の金融の動きを見ていくと、ネオマネーっていうものの正体や、その後の動きっていうのも全く予想できないわけではないというようなことかと思います。いろいろ論点があるかと思います。ちょっと休憩を入れて、その後に、皆さん感想なり、ご質問なり、課題図書のご質問は、既に紙に書いていただいているんですが、これを後回しにして、きょうの講演の話のほうから、ご質問なり、自分の感想なりということをお話をして、講師の皆さんと対話をしていただく。あるいは、皆さんの間で対話をしていただく。いうことにしたいと思います。それでは、50 分まで休憩をします。どうもありがとうございました。

(01:59:03~03:06:15)

藤山 それでは始めたいと思います。よろしゅうございましょうか。大変面白い話だったので、皆さんの中にはいっぱいお聞きになりたいことが、議論したいことがいっぱいあるかと思いますけども。では、きょうの講演の中からということで、副島先生の話からでも、松元先生の話からでも結構ですが、どんなことでも結構です。まず手を挙げて、自由意思で、ご質問からお願いをしたいんですけど。さあどうでしょう。はい、どうぞ。所属をお名前を分かるように。

マツイ トヨタ自動車のマツイと申します。本日はありがとうございました。私が本当に金融(###@01:59:54)会で、何て質問で、この本のような質問のほうで、本当に初心者的な質問だったんですけど、そこで書いてとったような、結局電子マネーによって、デ

デジタル通貨でどうなるのかということについての、リブラ等々、便利にはなってくるんだけれども、基軸通貨にはなり得ないですとか。いろいろ明快にご解説いただいたわけでございます。ありがとうございます。その中でなんですけれども、(####@02:00:26)そういうものが現実化していくかもしれないとか、そういった世界の中で、特に弊社って、ご存じのとおり、為替変動が業績に与える影響が非常に大きくて、先ほど通貨安定してたほうがいいということ。一番、摂理を持ってるものなんですけれども。そういった世界になっていくことによって、為替変動とか、そういったところっていうのは、今と比べてどう動いていくというふうに考えれば、大変ちょっと難しい質問ですけど、ちょっとそういうくんだり、すみません。自分なりにこうなるのかなっていうのが、ちょっとなくて恐縮なんですけど。

藤山 いかがでしょうか。それじゃ、副島先生から。

副島 それじゃ、私のほうから。為替レートが何で決まるか。(####@02:01:18)って大体二つあって、一つは実体経済の状況を反映して、景気がリンクに、あるいは物価上昇率が高いときっていうのは、金利水準が高い。金利が下がると、高金利国のほうと低金利国のほうで、為替レートの変換のスピードが変わる(####@02:01:36)っていうふうに、経済をベースにした考え方。あるいは金利だけじゃなくて、経常収支の赤字黒字っていうのがやっぱり為替レートに影響してくるだろう。こういう実体経済に起因するものと。もう一つは、マーケットの資金フローですね。金融市場の資金フローが当然市場の(***ジキュウ@02:01:56)を決めるわけなので、それで為替レートが動くであろうと。二つの、多分、見方があるってことですね。

それで、こういう世界において、資金移動の自由度が極めて速くなったリブラのようなものっていうのが登場してくると、多分、マーケットの資金移動って、ものすごく速くなると思うんですよ。銀行の預金っていうマネーって、国を越えて動かすことって、すごくやっぱり大変なんですよね。外国送金しようと思うと、私の話の途中にあった、コルレス・バンキングを使ってやらなきゃいけないって、そこには時間もかかるし、お金も高いしみたいになってね。でもスマートフォン使って、ひょいと送れるようになったら、資金移動ものすごく速くなるわけですね。そうすると、いろんなニュースとか、あるいはファンダメンタルに反応して、マネーフロー自体がすごく速く動くようになるわけなので、金融の面からボラティリティが高くなる可能性ってあり得るんだろうなというふうに思うんです。

藤山 じゃあ、今のお答えでよろしいですか。

マツイ すみません。ありがとうございます。

藤山 いい？ 本当に？

副島 もうちょっと、為替の予約とかそういうところも、要は外貨扱ってると、もう本当にコストの固まりなわけですよ。クロスボーダーの送金なり、あれはそれをヘッジするための為替予約なりっていうのですね。そこに便利な新しいマネーっていうものが出てくると、非常にコスト安でできるようになるから、そっちは今度はメリットとして働くんじゃないのかなというふうに思います。

藤山 はい。ありがとうございます。松元先生はどうですかね。今のご質問に対して。

松元 いや、あんまり付け加えることはありませんけれども。そうなればそうなったで、ヘッジのいろんな商品が出てくるとかですね。金融機関もそれなりに工夫するっていうのはあるんじゃないですか。

藤山 これ、あれですね。ネオマネーっていうのは、ある意味では、国家っていうものをどう考えるかってこと、非常に関係をするような問題を提起している文言ですけど、松元先生の話の中に、治安維持能力っていう話があって、それが一つの信用の根源みたいなことっていうのはあるんですけども。今は国家の中のことで、その国の基軸通貨の中でのネオマネーっていう、要は決済の仕方の変化っていうのと、それから全くリブラみたいに越えていくっていう世界のものと、考えられてますけど、越えていくっていうときに、BtoCみたいな世界、(###@02:04:52)の世界ともっと大きな国家間をつなぐような話とっていうのがあるとすると、どっちのほうに問題が発生しやすいのか。あるいは、どっちのほうがスムーズに動くのかっていうのは、どうなんですかね。今、リブラの問題を議論しようという土俵は、どこだっていうふうになってるんでしたっけ？

副島 リブラ。一番まとまった紙っていうのは、G20で・・・。

藤山 G20ですよ。

副島 ……出された紙だと思うんですけど。そこにリブラが抱えているいろんな問題ってのが列挙されてあるんですけど、例えば、マネーロンダリングに使われるんじゃないのかとか、あるいは金融システムの不安定性を高めるんじゃないのかとか、あと本当に入金したお金っていうの戻すことができるのかとか。リブラに替えるのはいいんですけど、それをまた自国通貨に、円に戻したいっていうときに、ちゃんと戻してくれるんですか。預金って、預金したら、預金引き出すことができる。当たり前ですよ。だけど、リブラで出したプロポーザルには、一体それを誰がやるのかっていうの、全くオープンでし、

その人が必ず自国通貨に戻したっていったときに応えてくれるかどうかっていうことに対しては、何も書いてないですよ。

藤山 逆に応える人がいないわけですよ。

副島 ていうか、何も決まってないんですよ。なので、本当にこんなのワークするのかっていうような、漠としたプロポーザルでポンと出てきたっていうところなので、そういう疑問があるんですけど、全くそういうのに書かれていなかった私の一番の疑問というのは、これもプレゼンテーションの中でちょっと話したんですけど、技術的にできるからといって、やっていいのかっていう問題は結構大きいと思って、小さい国にとってはたまらんわけですよ。リブラの場合には、パッケージになってた、通貨でしたっけ？ バスケットになってたんで、分かりにくかったんですけど。もっとシンプルにいうには、例えばあれドルですと。ドルとリンクしますと。ドルにペッグしたステーブルコインですっていったときには、簡単にドルが手に入りますよと。自国通貨を入れればっていうようなので、みんな、自国通貨を放棄して、ドルのほうにワッと走っていくと。そうすると、カンボジアみたいな話になると。

藤山 カンボジアは国が決めたかもしれないけども、国が決めないうちにそれが起こっちゃうっていう。

副島 起こってしまうということですね。カンボジアも国が決めたっていうの。

藤山 ていうわけじゃない。

副島 戦後のぐちゃぐちゃの状態の中でそうなっちゃったっていうこと。じゃあ、ベネズエラは何をやってるかっていうと、ドルの物理的なお金が国内に入ってくることを止めるんですね。港とか飛行場でですね。ていうのは、現金が入ってきたら、みんなその現金に喜んで替えていくので、1年後には紙切れになるようなものを持ってるよりも、一刻も早くドル札に替えたら、そっちのほうは価値は安定化するわけなんですよ。ドルのインフレ率の程度しか、価値は減らないわけなんですよ。だけど、それを認めてしまうと、あっという間に、自国内にドルがあふれ返ってくるので、物理的に入れないっていう作戦を、ベネズエラはやってるわけですよ。

それがいいことか悪いことかっていうと、ちょっと難しくて、例えばハイエク流の考え方をするんだったら、ベネズエラって国家運営にもう失敗してしまってるんだと。そんな国の中央銀行が出してる紙切れなんか意味ないから捨てちまえてっていうのが、ハイエクの考え方なわけですよ。もっと信用力を持つことができた、しっかりした人が出したマネー

を使えばいいんだと。だから誰が出してもいいんだ。結局勝つ人は、一番信用があるしっ
かりした人だから、みんながそれを信じようと思う人が発行したマネーが使われるって
いうのが、一番いい世界なんだ。そういう立場から考えると、ベネズエラの政府はけしから
んと。失敗してるにもかかわらず、国にドルが入ってこないようにしようとか、あるいは
リブラ的なものはなしにしようとかいうふうにして、国家の運営権っていうのを維持して
いると。能力がないにもかかわらずと。そんな状態はいいのか悪いのかっていうと、悪い
んでしょうね。

悪いんですけど、そこまで極端じゃないような状況において、本当にあなたの国の通
貨よりもドルのほうが信用できるから、だからドルが勝手に流通すればいいじゃないのと。
みんながスマホでドルを入れて、ドル・リンク・ステーブルコインを使ってやればいいじ
ゃないのっていうふうには、必ずしも言えないような気がするんです。

藤山 そうですね。

副島 これ、国家主権の多分問題になってくると思う。

藤山 そうですよ。国家の。そうすると、あれですかね。G20 だけで、問題点を議論を
するっていうのも完全ではないっていうことかもしれない。

副島 そうですね。G20、もちろん、エマージングも一部入ってるんですけども、ウェルデ
ィペロップをしてる国が、やっぱり多いんで。もっと下のクラスの国ですよ。そういう
国の人たちからしてみたら、なんかとんでもないと。リブラ自体は、金融包摂が、貧しい
人も誰でも銀行口座持てないような国の人っていうふうに言ってるんですけど。本当
にそんなこと言い出したの？と。むしろそういう国の運営者にとってみたら、自分
の国をぐちゃぐちゃにするのはやめてくれというふうに思ってる国のほうが多いかもし
れないですよ。

藤山 はい。

松元 私のほうから、ちょっと今のお話について、少し申し上げると、要するにニューマ
ネーって、IT 技術の上に成り立ってきてる、新たな技術ですよ。そうなってくると、イ
ンターネットはグローバルかっていう話が、もう一つ出てくるんだと思いますよね。ワー
ルドワイドウェブっていうんですけど、世界的に広がった、このネットって、最初そう言
われてたんだけど、今はワールドワイドウェブっていうよりも、中国なんかが典型的です
けど、ワールドディバイデッドウェブって言われるんですよ。それぞれバラバラだと。
本当にワールドワイドウェブだったら、イランに対する金融制裁なんか、あんなに効かな

いんじゃないか。それこそアンダーグラウンドのネットっていっぱいありますから、いろんなことできるはずなんですけど、でもそれって、やっぱりネットの世界でも相当分断されてるところがあって、そんなところに関わったら、とんでもないことになるよっていう話で、金融機関は誰も手出しませんから、イランは金融制裁受けて、お金は入ってこない。非常に大変な苦しい状況にあって、そういう状況の中でどうするかっていうようなことになってきて。

ですから、インターネットを使って、もうもちろん使ったのニューマネーで、それについての問題点として、マネロンの話とかってありますけど。これはまさにマネロンの話もあるし、そんなもんを勝手に野放しにするわけにいきませんよという話になってくると。これは、やっぱりそんなもんが、基軸通貨みたいなものにはなりようがない。先ほどは、安全保障ってことで申しあげましたけども、安全保障っていうのは軍事的な安全保障はありますが、マネロンとかそういうのも入れた経済の安全保障っていうのを、もう一つ考える必要があるのではないかなと思っています。

藤山 はい。整理をしていただいたかと思います。他にいかがですか。はい。どうぞ。

キドザキ キヤノンのキドザキです。きょうは、ありがとうございます。ちょっと今回本を読んでいて、疑似マネーは価値尺度機能がない中で、法定貨幣とどういうふうに結び付けるのかなと思いつつ、リブラの話ちょっと興味深く聞かせていただいたんですけど。そのリブラっていうものが、一体、誰がその保証なり信用なりを担保するものなのかっていうところが、ちょっと自分なりにまだ分かっていないところがあって、そこがちょっと教えていただければなと思って。

副島 リブラのホワイトペーパーで出てきたプランの中では、担保を取りますと。ちゃんと通貨を発行するときに、これ、ハイパーインフレになってる国なんかはそうなんですけど、勝手にバンバン通貨発行してたら、やっぱりハイパーインフレになるわけですよね。裏付け資産が何もないまま発行していくと。それだと、価値が安定しないので、1 リブラを発行するときには、ドルと円とポンドとっていった、バックにして、それに相当する金額の部分を銀行に預けます。もしくは信託口座に預けますと。その金額があった分だけしか出しませんって。というふうに言ってるんですね。

ここは、ステーブルコインの、価値の安定のさせ方の一つのやり口として、一番最初にこれが出てきたのは、テザーっていう、ドルのステーブルコインなんですね。1 テザー発行するときには、1 ドル分を別途お金をちゃんと銀行に持っておきます。なので、安全ですよっていうけれど。それが本当に安全だっていうためには、もう一工夫必要で、あなたがテザーをドルに替えたいと思ったら、いつでも替えてあげますよ、絶対と。私は倒産することなんかありませんよと。必ずお金返ってきますよっていうのあって、初めて、みんな

な安心して使えるわけですね。ところがリブラっていうのは、そうやって、入れるときにはちゃんとそうやってきっちりキープしてますって言うんですけど。何かあって、戻したいっていうときに、どうやって戻すのか、誰が窓口になるのか。何もプランないまま、ホワイトペーパー出しちゃったんですね。

じゃあ仮に日本でリブラを買いに行きますと。そうすると、仮想通貨だと、仮想通貨交換所に行けば、インターネットでそこにアクセスして、預金口座ひもづけて、預金口座から振り返れば、自分に仮想通貨発行される。それは交換してくれるわけですね。ところがリブラって、どこに行ったら買えるの？ 何も決まってないですって、買えるだけじゃなくて、買ったもの今度戻したいとき、本当に戻ってくるんですかって、原理的には戻るはずなんですっていうふうにしかないわけですね。なぜなら、そこはお金を預かっていて、それが増えたり減ったりしないようにきちんとコントロールしてるからって言いますね。でも、本当にそんなこと、そんな制度って、信用できるんですかって、実現できるんですかっていうのは、何も言ってないので、怪しい、危なっかしいと思ってるわけですね。

キドザキ 可能性はあるけれども、実運用とか何とかって言うの(####@02:16:06)とかが全然決まってない中で、目指す姿が先行していったる雰囲気なんですね。

副島 そうですね。

キドザキ 分かりました。

副島 原理はこうです。だからきっと安全ですって言うんですけど、本当にそうかっていうとですね。

キドザキ ありがとうございます。

松元 ちょっと違ったら直していただければいいですけど。通貨っていうか、貨幣と考えるから、何か、すごく高尚なものだと思って分からなくなっちゃうんですけど、リブラって要するに金銭信託の受益証券だと思えばいいですよ。要するに、ドルとかそういうやつ、金銭信託ですよ、金銭信託の受益証券を1リブラとか2リブラとか言ってるんで、金銭信託の受益証券を持ってって、信託の金融証券の受益証券だったら、場合によってはオーバージャパンだっていうか、店頭で証券会社が買い取りますよっていう仕組みだって、つくろうと思えばつくれるわけだから。今は分からないけど、リブラ、本当にやるんだったら、考えるでしょうけど。でも、そこをまだ明らかにされてないの、そんなもん、よく分からないよね。

キドザキ 分かりました。ありがとうございます。

副島 私もおっしゃるように、そうかって、確かに自分自身でプレゼンテーションの中で、譲渡できる債権はマネーになるっていう話をしましたですね。

キドザキ はい。

副島 金銭信託っていう債権を自分は持ってます。その債権は誰にでも渡すことができますと。そして、もらう人は、うん、信じるよっていうふうにもらいますと。そしたら、それは決済手段、マネーになり得るわけですね。でも、それはその価値がきちんと安定してるし、それを実際に人に渡して、その人がうんって受け取ってくれる。受け取ってくれるのは、それを発行した人のところに持っていけば、必ず元のお金が返ってくるからっていう安心があるからですね。

キドザキ はい。

副島 その安心を生み出す制度って、何のプロポーザルもないので、本当にワークするのって。

キドザキ なるほど。ありがとうございます。

藤山 今のキドザキさんの疑問、どうですかね。その他の方、発展させてもいいし、はい。どうぞ。ウメハラさん。

ウメハラ (###@02:18:13)のウメハラと申します。きょうは、どうもありがとうございます。恥ずかしい質問です。マネーとか現金とか預金とかっていうのを、あやふやな頭での質問でちょっとお許しいただきたいんですけど、市場とマネーの関係なんですけれども、この講座って、市場原理っていうものを規範の一つとして扱ってるということが、ちょっとそこを整理したいんですが。マネーは、物々交換っていう話がもともとありましたが、市場があるからこそマネーの機能が必要になって生まれてきたっていう理解で、まずよかったかどうかなんです。もしそうだとすると、市場原理そのものが揺らいだときに、マネーも揺らぐんじゃないかっていう気もするんですが、ここでいうネオマネーっていうのは、マネーの構造が変化するだけで、市場原理とはリンクしているのか・いないのか。ちょっとそこが、実は自分の中で自信がないので、確認させていただきたいなという質問なんですけど。

副島 一番最初のイントロのところでヤップ島の話をしたんですけれど、何のためにマネー生まれてきたかっていうふうにと、支払いをするためですね。まずは、目的として。その支払って何で生まれたかっていうと、お金を渡さなきゃいけない状況がある。自分は何か債務を負っていて、その債務をクリアリングする必要があると。きれいにする必要はある。例えば、お店で何かを買ったときに、お金を払いますよね。あれは、物をもろうってということによって、自分は債務が発生するけれど、その債務をその瞬間にお金を渡すってということにして、クリアするから、同時支払いなわけですね。リテールで、そういうことを言うと、何言ってるんだって話かもしれないですけど。ホールセールの企業間決済を考えたときには、これ、普通にこれ、起こるわけですね。つまり、お金全部後払いなわけなので、手形もそうですけれど。まずは物をもろう、サービスをもらうけれど、お金は払わないと。債務が発生する。その債務を手形という形で、債権として相手に渡す。その債権は3カ月後に履行されるっていうのが、企業間決済。売掛金・買掛金も、全部そうですね。

なので、お金の誕生って、そういう、何かの形で債務が発生したのを決済するためにクリアするために、存在しているものなんだっていうふうにと考えると、それって別に物理的なものであって、そのときに渡せる物理的なものでなくてもいいわけなんですよ。私はあなたに借りができましたと。幾ら借りができてるんです。ずっと頭の中で覚えてますと。それでいついつまでに返してねと言ったら、それをちゃんと返しますっていうのって、手形と全く原理は同じなわけですね。それじゃやっぱりあんまり心もとないので、物理的な手形っていうものができて、動いてきてるわけなので。

なので、市場があったというよりも、市場と言ってもいいのかもしれないんですけど。市場が同時発生するのは、貸し借り関係ですね。その貸し借り関係を清算するためにマネーっていうものが生まれたと。そして、そのマネーは、決してコインの形をとったものではなくて、あなたと私の間に貸し借り関係が幾ら生じましたっていうのを、ちゃんとコントロールするための記録装置だった。あるいは記憶装置だったと。ていうふうにと考えると、市場が生まれる一つ、1ステップ前のところで出てくるんだろうと。

じゃあ市場経済の、せつかく市場っていう話が出たんで、もう一つの私の推薦本の中に、『贈与の経済学』っていうのを入れてました。あれも大変面白い話なんですけれど。貸し借り関係で、私は、あなたに何かを負っていますっていうのって、いつ生じたのか。つまり債務っていうのは一体いつ生まれたのか。債務というコンセプトですね。ものすごく昔々、人間がまだサルに近かった頃って、原始共同体で、自分の物はみんなの物、みんなの物は自分の物っていうときに、貸し借り関係はないんですよ。みんな、全部支配してるから、原始共同体においてはですね。ところが、いや、これは俺の物なのだと。それをあなたに使わせてあげるとか、あるいはあげるっていうのは、あなたは私に借りができたよねっていうのって、原始共同体から一歩踏み出した瞬間に、貸し借り関係が生じてくるわけですね。これが、多分、債務の誕生なんだろうなというふうに思いますね。

そこには、市場よりも多分、もう一つ前の何かこう、何も貸し借り関係っていうの誰も考えなかった、多分動物でさえ、ひょっとしたらそれを持ってるのかもしれないですよ。貸し借り関係はですね。その時点で、それを債務と、債務債権関係って動物の間では言うのかどうか分からないんですけど、その貸し借り関係っていうのが、一番プリミティブなマネーの発生源なんじゃないのかなというふうに、『贈与の経済学』を読んでも、そう思うんですよ。

その『贈与の経済学』は、鎌倉時代の話から始まっていて、日本って、皇朝十二銭っていうのが、奈良時代の律令国家の成立と同時にできたんですね。それは国家というものが、それこそ軍事力って、国を守る、守るじゃない、ある一つの国家を運営していくための軍事力がきちんと確立されたっていうのが、奈良時代であって、それと同時にマネーってのが生まれたんですけど。それは平安時代に消えてなくなるんですよ。それで、それが、でも徐々に復活してくるのが、鎌倉から室町期にかけて、室町期には明確に土倉っていう金融業者っていうのが出てきて、手形類似のものが出てきたんですけど。

そのもう一つ手前の鎌倉時代のところに起こったので、その本に出てくる事例としてあるのが、折り紙っていうもので、折り紙って何かっていうと、貴族が寺社とか国に対して、物を寄贈するんですよ。寄贈するけれど、寄贈しましたって目録を先に言って、実際に物が届くのは半年後とか1年後だったりするわけですよ。そうすると、その目録を今度は、物が届く前に、誰かに渡しちゃう。それは所有権の移転っていうのを、寄贈目録を横流しすることによって、その所有権みたいなものが移転していくんですよ。そんな形での何ていうんですかね。債権債務関係の譲渡みたいなものっていうのが、鎌倉時代に起こってきたんじゃないか。それがマネーのはしりになって、それが室町時代にやがて手形類似のものとして、きちんとした金融商品としてコントロールされるようになってきたんじゃないかって話とかね。

だから、本当にさかのぼると、債務の誕生まで行くんだろうなと、市場っていうのは、多分、それのもっとずっと後なんだろうなと思います。その中間に贈与っていう形での、贈与も完全にあげるのではなくて、贈与したら、貸し借り関係が生じますですよ。その貸し借り関係が市場化される手前の、原始共同体、贈与、そして市場っていうところで、フェーズ的に発展してきたんじゃないのかっていうの、(###@02:25:36)は述べてる。

藤山 お分かりいただけましたですかね。

ウメハラ 分かったかと自信を持っていうと、すごく(###@02:25:43)。

副島 私もしゃべりながら、あんまりよく分かってない。

ウメハラ 歴史に学んでとか、マネーの本質が実は変わってないってところにも通じるか

なという気がした。市場原理の発展の歴史とかっていうのも、講座の中でありますけど、ちょっとそれとある意味独立したというか、少し広く捉えることができる概念だなんて感じはしました。

藤山 今の説明で、すごく分かりやすかったと思いますよね。他にどうでしょうか。次の質問。あれ？ はい。どうぞ。

ヤマモト AGC のヤマモトです。よろしくお願いします。きょう、ちょっと遅れて入ってきたんですけど、何か非常に身近で分かりやすいお話が聞けて、なんかちょっと部屋を間違えたんじゃないかなっていう、最初は思ったんですけど。その中でちょっと、副島先生のところで、クロスプラットフォーム戦略で、スーパープラットフォームが何ていうんですか、社会を支配しようとしているというか、というお話があったと思うんですが。私自身、楽天系のヘビー・ユーザーで、プレミアム会員でもあるんですけど、実は楽天カードは使っていて、楽天市場も使ってるんですけど、他のサービスっていうのは全然使っていないんですね。確かに楽天をやってるから、見てはいるんですけど、例えば楽天モバイルを使うと、楽天市場のポイントが1パーセント上乘せになるとか、楽天銀行を使うと、楽天市場、プラス1パーセントになるとかあるんですけど。それぞれのサービスを他のサービスと比べてみると、やっぱりメリットが薄くなってことで、採用してないですね。そういうことを考えると、この日本で、スーパープラットフォームが、クロスプラットフォーム戦略をやっているものの、あまり成功していないんじゃないかなっていうふうに見えます。

一方で、先ほどのお話で、WeChat Pay ですか、何でしたっけ？

―― アリペイ。

ヤマモト アリペイなんかは成功してるというふうに、伺ったように感じているんですけど。その辺が中国ではなぜ成功していて、日本ではなぜ成功していないか。そこら辺の歴史的背景みたいなのが、例えば、われわれの議論の中では、クレジットカード、中国ではあんまりはやってなくて、それで一気にそういうペイみたいなキャッシュレスがはやってるんじゃないかっていう話もあったんですけど。そこら辺についてちょっと、個人的にちょっと興味を持ったので、教えていただきたいのと。

あと、もしお金の流れが社会を支配するっていうことであれば、何ていうんですかね、グローバリズムの(****サンキハン@02:28:36)のところと結び付けるとすると、クレジットカードのほうは例えばアメリカの、日米欧側のグローバリズムが、今、サンキハン引っ張ってるほうで、中国のほうは大陸にいるほうっていうことで、どっちにつくかで、これからの世界、もっと揺らいでいくのかなとか思ったりもして、ちょっとこじつけなん

ですけど、お話を聞けば、よろしくお願いします。

副島 最初のお話は、なぜ QR コードのような、一見するとあんまり効率的じゃないようなものが中国ではやっちゃったのか。日本も、それに突撃してってるのかっていうところの理由もあるんですけど。そもそもの質問は、スーパー・アプリのようなものですね。クロスプラットフォームが成功してるのはどうしてかっていうところだと思うんですけど。たまたまなんか、私はあれは、アリペイですか、アリペイのものが、アリペイの中にミニアプリが入って、そのミニアプリを使って、いろんなサービスにアクセスできるよっていう利便性が、中国において、そういう戦略で成功したがゆえに、このスーパー・アプリってあって。実はスーパー・アプリって、中国以外ないんですよ。アメリカとかヨーロッパではもちろん、こういうクロスプラットフォームっていっぱい戦略なされてるんですけど、親アプリの中に子アプリがいっぱいあって、そこを使って、みんなアリペイ・WeChat Pay のお金を使って、(#####@02:30:10)そういうサービスを消費していくっていうのって、ないんですよ。

日本も実はないんですよ。メルペイは近いのかもしれないんですけど。メルペイとメルカリのサービスが、アプリ使ってみると一体化してるっていうのが大変よく分かってるんですけど、分かるんですけど。じゃあ LINE のところがどれだけ親密にくっついてるかっていうと、私も LINE、ほとんど何とかペイって、スマホの中に入れて、全部ちょっとずつお金入れて作ってみてるんですけど。LINE で使うのって、人に送金する、チャージするときに、ただ、これ、相手が LINE 使ってないと駄目なんで、あとスタンプ買うときですね。それくらいしかなくて、実はあんまり使わないよねっていうところなんですよ。だからそういう意味では、日本のクロスプラットフォーム戦略ってのも、まだ成功してる場所って、多分ないんだろうなと思いますよ。

じゃあ実際この辺の中での収益を本当に生めるようなところって、どこか。決済っていうのは、全くもうからないと。赤字垂れ流しながら、他のところでもうけるための入り口のサービスにすぎないっていうふうに位置付けたときに、じゃあ全体でビジネスで成立するためには、すごくもうかってるところがなきゃいけないわけですよ。この中でもうかるフィールドって、エレクトリック・コマースのところと、それから広告ですよ。ここは、広告っていうのは明示的には出してないんですけど、そこの二つは、明らかに今で収益を上げてることができているんですけど。他は、いろいろやってみてるものの、なかなかもうからない。例えば金融サービスのところ、みんな、金融に出ていきたいっていうふうにしてやってるんですけど、例えばじゃあ LINE ほけんがどれくらい売れてるか、LINE 証券がどれくらい売れてるかっていうと、残念ながら、ほとんど盛り上がってないんですよ。それがなぜかっていうのは、よくまだ分らないんです。そういうところで保険を買うっていうのに慣れていないからだとか。

でも、中国だと、そういうスマホの上で、飛行機搭乗遅延保険とかいうのって、ものす

ごくはやってるんですよ。あるいは、エレクトリック・コマースで買ったときに、中国配送が乱暴なので、届くと大体何割か壊れてるっていう状況なんで、そこに保険を簡単に100円で掛けるっていうのは、ものすごくよくなされていて、エレクトリック・コマースで物買うと、買ったすぐ横にチェックボックスが来て、そこにチェックボックス入れると、100円で保険、デリバリー保険が掛かりますよみたいな形で、ものすごくよく使われているんですよ。

ただ、日本はまだ、そういう環境にきてないので、どこでそういう、日常で使うようなサービスとして、こういうものを普段よく使うようになってくるのかっていうのって、結局、そのサービスの提供を、ユーザー・エクスペリエンスなり、慣れなり、社会習慣なり、そういうのうまくつくり出すことに成功したようなビジネスっていうのが、多分、テークオフしていくんだろうなと思いますね。それに今、できてるのが、エレクトリック・コマースと広告ビジネスのところだけ。そのフォーマットが、どんなフォーマットになるのかっていうのは、中国のスーパーアプリだけのような形ではないというふうに思ってます。

それで、にもかかわらず、私が、スーパー・プラットフォームっていうふうに言ったのは、アプリじゃないところで、この現象っていうのがものすごく起こってるんですね。例えば、サンサンクラウド、名刺、サンサン、名刺会社ですよ。あれ、もう名刺会社じゃなくなってきたんですよ。何やってるかっていうと、例えば皆さん名刺交換したときに、大会社だったらどんな会社か分かりますと。でも初めて聞いた名前の会社だったら、これどんな会社なんだろうって、業績どうなんだろうって、気になるわけですよ。そうすると、何が欲しいかっていうと、会社四季報だったり、あるいはもっと小さい会社だったら、帝国データバンクですよ。それでサンサンクラウドサービスは、帝国データバンクと提携してるんです。その名刺情報をインストールすると、その企業情報を帝国データバンクのデータベースからバンと取ってきて、名刺にところにポンと付くわけなんですよ。あるいは役員の名前とかもダーッと出てきて、セットでバツとすぐ分かるわけなんですよ。というふうに、他と提携してる。

それから、もう一つは、この人、反社じゃないよねっていうふうな、とてもやっぱり、金融業だととてもあるわけじゃないですかね。そのときにチェックしたいのは何かっていうと、反社データベースを持っている、例えばトムソン・ロイターなんかと提携してるんですよ。そうすると、そのオプション・サービスを買えば、チェックっていったら、反社データベースにバツと取りに行って、大丈夫ですか。いや、これまずいですとかいうのが出てくるわけですね。

あるいは、会社四季報とか、帝国データだと、未来予想することはできない。去年の決算は見れますと。だけど、今年の業績どうですか、来年の業績どうですかっていうことは分からないわけですね。でも、知りたいのは、この会社の未来なわけですね。本当にお取引すべき会社なのかどうかって。そうすると、AIを使って、今、ネット上にあるいろんな情報とかバーッと集めてきて、それでそれに基づいて企業の今の現状状況とか未来とか

を予測しているビジネスっていうのが、やっぱりいっぱい出てきてるわけなのね。そういうところと提携してると。そういうサービスもオプションで付け加えていると。そうすると、名刺っていうのって、単に入りにすぎなくて、その名刺を使うシーンにおいて、どういう需要が出てくるかって、その需要とフックできるようなものってのを、ワットとひっくるめて、1 パッケージで提供してくれるって。そうすると、名刺サービス自体のクオリティーも上がるし、その周辺サービスとしてあるようなものに対しても、オプションでお金を払うようになるし、相乗効果がものすごく強く出てくると思いますよね。

それから、すみません。長くなるんですけど。コマツの例も、建機のコマツの例も非常に面白いなと思っていて、これもプラットフォーム戦略化してるんですけど。もともとは建機の稼働状況を知りたくて、建機がどこにあるか、あるいはどれだけ動いてるかっていうのを GPS とかで全部コントロールしてっていうことをやられてました。ところが、それだけではやっぱり面白みがないので、建設現場の施工状況をスムーズにコントロールするために、資材の動き方とか、建機だけじゃなくて、それがどう動いて、どれくらい稼働してるのかってことで、状況の進み具合とかをモニターして、それを現場管理に使いたかった、使おうとしたんですけど、それだけじゃ全然やっぱり駄目だったのが分かったんですね。何でかっていうと、下請け会社が、どれだけ資材をきちんとそろえて、人間をそろえて持ってきてくれるかっていうところ、そこまで把握しないと、現場進行管理なんてできない。

そこで彼らはそのプラットフォームを拡大して、その工事に関係している、あらゆる業者の人たちのいろんな情報っていうのが入るようなデータベースっていうのを構築して、それを現場管理に使うようにしたわけですね。そこではたと気付いたのは、これって、その建設会社、子会社、孫会社の、引き受けしてる会社の仕事の受注状況とか、それからそれの人手不足状況とか、進捗管理状況とか、要はその会社の経営状況が丸分かりになりますよねと。そうすると、それって、その企業の経営状況の判断にも使える。そこで次に銀行が、きょうもいらっしゃると思うんですけど、三井住友銀行さんが提携して、これを与信判断に、融資のチャンスにする。あるいは融資を断るための、ミスしないための、情報として活用する。そういうプラットフォームに、これ、活用していくことが、多分できるんじゃないかっていうことを、検討されてるという。始められたのかどうか分からないですけど、そういうことを想定して提携してる、なさってるので。

いろんなデータって集まってくると、どんどん相乗効果でいっぱい出てきて、思いもよらなかったことに使えるようになってくる。そういう発展の仕方ってのが、プラットフォームを1個で考えるんじゃなくて、プラットフォーム同士をくっつけると、とんでもない付加価値を実は生み出すようになるんじゃないのかという戦略として出てきているので。そういう発展の仕方を、日本とか欧米の国の人たちはするんじゃないのかなっていうふうに思ってます。それが1個目の質問で、二つ目何でしたっけ？

藤山 (####@02:38:49) 中国で、そういうスーパーみたいなのができたかもしれないけど、他の国ではそういうのはできないっていうのは、あるいは市場原理の世界が出来上がってて、クレジットとか、そういう世界がもう網の目のようにできてるから、こちらの中国のほうがそちらのほうにバツと進みやすくてっていう世界の構図にならないかっていうような質問ですよ。

副島 どっちがいいでしょうね。何も、遅れてたところが、(####@02:39:23) ジャンプできるので、一気にドカッと進むっていうのは、多分あると思うんですね。インフラが遅れてるほど、1回キャッチアップしたら、とんでもなく進むので、これ、決済で実際起こっていることなんです。日本の決済インフラも、三十数年前にベーシック、全体像ができてしまったので、それをいじろうとすると、結構大ごとであったりするんですけど。エムペサのように、ケニアのですね。資金送金システムの、(****ボーダフォン@02:39:50) がつくり上げたシステムですけど。要はスマホと手提げ金庫を使えば、ATM 網ってできるよねということで、とてもコストレスな ATM ネットワークが、あっという間にスマートフォンと手提げ金庫でできちゃったっていう事例がそうだと思うんですね。

そのときに、何もないところで自由につくれるから、最初に(####@02:40:14) 使ってつくれるからっていうことと、それから統制が利くっていうところって、どっちなんだろうっていうのは、どっちなんでしょうね。中国の、今の、監視カメラがたくさん付いて、それによって車の流通網のコントロールが完全にできたり、入国審査ができたり、犯罪を抑止できたりっていうのって、効率的な社会をつくるために、非常にプラスに効いてるわけなんで、統制をしてる国のほうがいいかもしれないです。

それから、関連した話で、社会主義って、ソ連が最初に、ソビエト連邦が最初に出てきて、計画経済っていうのやり始めたときに、やっぱり情報が、人間がどう活動してるか、企業がどう活動してるかって、全情報集めてくることはできないし、それを処理する能力もないから、計画経済っていう掛け声見掛け倒しだよなって言ってたんですけど、今はできるようになったわけですよ。誰がどこ歩いてるかとか、企業が何やってるかとか、ものすごい精度な情報で集めることができ、しかもそれを最適化するようなレーザー処理能力っていうのができてきた。「計画経済って実は可能なんじゃないのか」と。結構中国のある人がしゃべってた、言ってる、実はそういう意味では、社会主義とは言わなかったんですけど、計画経済は正しいアプローチかもしれないっていうことを言い出してるようで、それは結構面白い話かもしれないなと思ってますね。

ただ、そこにはやっぱり情報のプライバシーとの問題っていうのがあって、これはシンガポールの人が言ってたんですけど、中国が今、プライバシーなんかなくなっちゃって、豊かになればいいやと思ってるのは、貧しかったからで、かつ成長が激しかったからで、その成長がずっと 5 パーセント 6 パーセント成長が未来も続けばいいんでしょうけれど、やがてどこかで成長が頭打ちになってくると。そのときはもうみんな豊かになっていると。それ

が当たり前になっていると。そうするとまだ手にしていない、つまりプライバシーがきちんと守られている、そこに対して、それが欲しいということ言い出すかもしれないと。

シンガポールは実は、管理された国家なので、明るい北朝鮮と言われるようなところなので、それがでも文句はなかったのは、どんどん社会が豊かになっていって、みんながいきい暮らしができるようになってきたからで。それが先に、中国よりも先に止まってしまったと。そうやって、管理国家であることに対するじわつとした不満っていうのは、国の中に実はあるんであると。その不満っていうのは、多分、中国が成長の壁にぶち当たったときに、より激しい形で出てくるかもしれないですよ。ていうのは、シンガポール以上に激しい管理国家であるわけなのでですね。なので、そこに来たときに、経済計画のプラス面っていうのが逆にマイナスに出てくる可能性もあるかもねっていうような。その人が言ってたんでしょけど、一緒ですね。

松元 キャッシュレス社会になるのに、中国みたいなところはいいのかっていうことの関連で、若干補足すると、中国ではない国でキャッシュレスがものすごく進んでるのは、スウェーデン。スウェーデンの場合は、ただ、要するにそういうサービスを提供する主体っていうのは極めて限られてて、非常に限られてるでしょう、スウェーデン。

副島 二つですよ。クレジットカードと Swish。

松元 クレジットカードと Swish と、二つしかないんですよ。日本みたいな、楽天カードがあつて、さっきのあれじゃないですけど、何々があつて、群雄割拠みたいになってないんですよ。そういう、要はキャッシュレスになるかどうかっていうのも、使う人が便利だと思えばそっちに行くんで、便利だと思わなきゃそっち行かないんで、ポイントだけもらってればいいやっていう人がいっぱいいる。それがほとんどだっていうところは、ポイントがなくなったら、みんな使わなくなっちゃって、別にこれもうからないもんねっていうのをそんなにみんなやるわけもないので。例えばドイツなんかキャッシュレスあんまり進んでない。これは、ドイツの特殊事情があるとか、いろいろ言われたりしますけど。

要は、みんなが便利だと思えば、そっちのほうに行く。現金がやっぱり便利だっていう人は多いし、私も現金がなくなっちゃったら、ちょっとやだなと。あるいは(###@02:44:43)将来出てくるかもしれませんが、いずれにしても、いろんなテクノロジーが進歩して、便利なものが出てくるのは大いに結構ですけど。無理やりキャッシュレスにしなきゃいけないっていうもんでもないんで、キャッシュレスになってないから、日本は遅れてるんだという発想は、ちょっと違うんじゃないですかというふうに思います。

藤山 はい。副島さんの後半の話も規範の話に完全に踏み込んでいたと思うので、シンガポールの話も中国の話も、そういうテーマから答えることができると思います。まだ発言

されてない方いますし、ちょっと時間があれてきたので、質問のほうだけ先にいただきます。今、発言されてない4人ですよね。2人ずついただきます。じゃあ、このテーブル早かったんで、二つ、2人行きましょう。

Aー 手短に質問だけ。こういった電子マネーとか、ああいうところって、利用者は便利さでやっぱり選んでいくんだと思うんですけども、一方で先ほどのマネーとか貨幣っていうのは、信用されるものに淘汰される。信用っていうのは、治安で担保されるっていうところで、便利さで選ぶっていうこと、信用っていうところで、どんどんギャップが広がっていつてしまうような気がするんですけども、その理解で正しいのかっていうのと、そうなったときに、やっぱり崩壊じゃないですけど、いずれ崩壊してしまうっていう。要は非常に、最終的には混乱を招いてしまうところに陥ってしまうのかっていうところを、ちょっとご意見いただきたいなと思いました。

藤山 はい。

キクタ 東北大のキクタです。きょうはありがとうございます。各国のボーダーがなくなる中で、先ほど言われた企業とかグループが、藩札のようにだんだん煩雑化していると思うんですが、その中で決済業者がネオマネーとかの関係で行くと、ちょっと本読ませていただいたときに、貨幣(****キ@02:47:02)とか、もともと貨幣の関係であったときに、国のメリットとかがあったと思うんですが、ネオマネーでボーダーライン、他の国がなくなって、こう少なくなっている場合のメリットというところがちょっと見えなかったなということと、あと、すみません。その中で商業銀行がなくなるっていう話を聞いたときに、本の中でも貨幣と一緒に並んでいた、国債の話、国債の関係の取引っていうのは、商業銀行がなくなった段階では、中央銀行としてはどういうふうな将来構想を描いているかって含めて、すみません、質問させてもらいました。

藤山 どうですかね。あと2人残ってて、6~7分で、今のやつの答えをしていただけるとありがたいんですが、答えからちょっと入って。いや。

副島 もういいですか。一番最後の質問のところで、民間銀行の機能がなくなるっていうのはとても困ることで、信用創造機能、金融仲介機能と信用創造機能ってべったりくっついてるんですけど、それを中央銀行がやるわけにはいかないんですよね。なので、それを侵食してはいけないわけだから、それにマイナスになるような政策は採れないだろうなというふうに思っています。

それから、その一つ前に、国境っていうのがどういうふうに変わっていくのかっていうところだと思うんですけど。やっぱり資金移動が大変自由にやりやすくなってくるって

うところでの影響っていうのはすごく出てきますし、そのためにやってるんですね。今のマネーシステム、決済インフラっていうのは、不便である。夜中動いていない。国境またぐと大変であると。何日も時間がかかる。お金も高い。なので、それをよくしようっていうふうにしていってるので、当然、経済学が想定してるような完全な、パーフェクトな市場にどんどん近づいてくるわけですね。裁定が働きやすいような。そのときって、マネーの動くスピードがものすごい速くなってくるので、そこは逆に今度は市場不安定化させるような要素っていうのが働くと思って。

自由であればあるほどいいかっていうと、ある程度摩擦があった経済がいいと。究極的には金融政策って、摩擦がない、何ていうんですか、言われるよく(#####@02:49:21)です、ツルツルの世界っていうんですけれど。摩擦が何もなくて、あつという間に実質価格のところで調整されるような世界においては、金融政策は全く効かないんですね。金融政策って、マネーの金利、名目金利ですね、将来と未来の相対価格の変化のっていうところで、実質金利と名目金利の間にギャップを生じさせることによって、政策効果を出そうとしてるんですけれど。それがあつという間に、実質金利に全て収束してってしまっ、名目を考えることが何の意味もない世界だったら、名目金利、名目マネーサプライっていうのコントロールしてく金融政策は、完全に効かなくなるわけですよ。そういう意味では、あんまりツルツルの世界っていうのも問題なんだろうと、摩擦がない世界って問題なんだろう。ある程度、そういうゴリゴリ摩擦が存在してるほうが、かえって世の中うまくいくっていうのはあるんじゃないのかなと思っています。

藤山 松元さんは、よろしいですか。次の質問受けちゃっていいですか。

松元 大丈夫ですよ。

藤山 受けちゃって、後でまた話。じゃあ、タケウチさんと、サイトウさん、お願いします。

タケウチ 第一生命のタケウチと申します。よろしくお願いします。私が、課題図書の中で、ちょっと腹に落ちて、きょう聞いてまたぐちゃぐちゃになってしまったんですけども。国が認めてそのもので納税できるものを通貨とするといったような江戸時代の背景から、今って、ビットコインですとか、国も認めてません、納税も認めてませんっていうところに、もう変わってきていますといった中で、ちょっと私、やはりちょっと税金と、新しく生まれてる通貨との関係性っていうのがちょっと、何となく知りたいなと思ってんですけど。例えばビットコインっていう、そういう仮想通貨の中で上がった利益を国っていうのはどう認識していて、どう納税させるっていうのが、一つどういうスキームが、今、あるのかなっていうのが、普通、思っちゃって、国として通貨として認めていない、

その世界の中で利益が上がっていて、その益に対して税がかかってきて、何で納税させるのかとか。

ちょっとその辺りっていうのが、日銀さんが税金の辺りはされないかもしれないんですけども、国の根幹を支えている税金っていうのと仮想通貨っていうものの関係性っていうのが、私が一番最初に腹に落ちた、国が認め、納税を認めてるところから、どういう、今、位置関係に変化したのかなっていうのが。ちょっと私の中で、そもそもマネーっていうのが、私、現金で手元にある実物だと思ったものが、きょうの定義の中で、ポイントもそうですねとか、トークンもそうですねってなった中で、何がどうなって税金がこれからなっていくって、国の根幹を支えていくのかなっていうのが、少し、迷子になってしまったっていうのあったので、何かご意見いただければと思います。

藤山 はい。サイトウさん。

サイトウ 日産自動車のサイトウと言います。ちょっとあんまりすっきりした質問にまで消化しきれてないですけど、ちょっとお許してください。きょう、ただ、ヤップ島の話から江戸のつけの話、これの信用の記録が最終的にバーッと飛んでいって、デジタルの中での信用っていうのとつながっていくと、そういうことなのかと。あんまり複雑じゃなくて、そこが、形が変わってきているっていうことが、一番よく分かりました。先ほど、それで、そのデジタルの貨幣になっていったとき、デジタルマネーになっていったときに、三つの規範、市場原理、三つの規範のうちの市場原理に対して、もうちょっとプリミティブなところの話ですよっていうの、先ほど議論になりました。

一方で、今まであった近代からつながってきた規範がだんだん揺らいで、次のフェーズに移行するんじゃないかという議論をみんなで課題意識として持っている中で、そのプリミティブでありながら、それがスピードだったり、先ほど言っていたいろんな抵抗だったり、コストだったりを変えていくと、さらに新しい市場原理を生み出す、ドライブとかインセンティブになっていくんじゃないのかなというのがあり、何となく(###@02:54:04)起こりました。ちょっと質問にまでなっていないんですけど。

もう一つあるのが、私、会社はいわゆるグローバル・エンタープライズというか、世界中でビジネスをしています。世界中で物のやりとりをしたりしています。一方で、実際のそこで動くお金は、国を越えていく。さっき問題になりましたけど、結構大変なことです。特に中国とのやりとりなんか、本当に大変です。あそこの収益が引き戻せませんっていう、お金としては。これをじゃあ新たなテクノロジーで生まれたデジタルマネーって、会社の中のそういう仕組みをうまくマネジすることができるのかなというの。何となく、自分での自問自答の問いなんですけど、そのことを思いました。

藤山 はい。ありがとうございます。いかがでしょうか。

松元 じゃあ、私のほうから。

藤山 松元さんのほうから、そうですね。政治も出てきたし。

松元 いや、国が認めて納税できるものが通貨って、そういう定義もあるとは思いますが、必ずしもそれにこだわる必要はないと思います。リブラの前の、ビットコインとかね、こういうやつは金融資産、デジタル資産って言ってたのかな。要するに通貨とは認めなかったんですよね。少なくとも日本は認めてない。ですから、何を通貨と考えるかっていうのは、その時々によって違うし、現在では中央銀行が発行してるものが通貨いうことで、それが(#####@02:55:46)それが(#####@02:55:48)になってますよと、こういう話です。

税と通貨の関係って、税は利益のあるところに税金かける。それだけの話。ですから、発行益という形で出てれば、ただ、それをどこの国がどう課税するかっていうのは、これは一般のデジタル経済の中で、(#####@02:56:07)に対してどう課税するかっていうのと同じような話になって、そこはこれからいろいろ議論がされていくという話になって、別にこれは通貨に限った話ではないと。こういうことだろうと思います。

それから、会社の中で新たなこういうフィンテックのやつを使っていくっていうことは、これから十分起こり得ると。使えるものがあれば、どんどん使っていけばいいし。そういう送金とかいろんなやつを合理化すると。そういうサービスっていうのもいろいろ出てくるでしょうし。最終的には、やっぱり金融機関は全く使わないでっていうわけにいかないにしても、今、ある金融機関に(#####@02:56:47)それを節約する形で、いろんなアプリケーションですとか、そういうのが出てくるだろうと思います。そういうのは、各社がそれぞれ使っていただくということになるんじゃないかなと思います。

副島 最初の税の話なんですけれど、マネー、何がお金かっていうと、みんなが受け取ってくれるものがお金なわけですよね。それはじゃあ受け取れませんかって言われたら、お金にならないわけで。スウェーデンは大変なことに、現金がお金にならなくなっちゃってるわけですね。現金お断りって言ってるわけだからですね。それで、税として、国がそれを払ってくれるのを認めるよっていうのは、それをサポートする一つの大きい業績にはなりますよね。国がそれで受け取るって言ってるわけだから、あなただって受け取ってくれたっていいでしょうってんで。嫌だったら、嫌だってそれを国に持っていけば、それを国がお金として受け取ってくれるわけだから、いいじゃないですかと。一つの強い要因にはなるんですけど、多分それだけでは恐らくないだろうなと。

逆に、それで受けるよって言われたけど、俺は受け取りたくないっていう人はいるはずなんですよね。そうすると、何がこれをお金として受け取っていいかっていう要因って、

他にも多分いっぱいあると思うんですね。インフレもそうだと思います。インフレが、ハイパーインフレが進んでる国って、お金、現金で受け取りたくないんですよね。1 日たったら、価値が(####@02:58:07)とかになっちゃてるんですね。そういうときには、たばこでくれとか、そういうことだってきつと起こり得るはずだと思うしね。そういう要因って、多分、いっぱいあり得るんだろうなと思います。

それから、税っていうのでちょっと思い出したんですけど、リブラのもう一つ言われた問題は、通貨発行益っていう概念があるんですよ。通貨を発行すると、お金って金利付かないんですよね。通貨発行するときには。対価として、日銀の場合だったら、銀行の日銀の預金口座にお金を出すときにはただであげてるわけじゃなくて、何かアセットを買ってるんですよ。典型的には国債を買ってるんですよね。そうすると、マネーを作り出すことによって、国債を自分は持ってるわけですよ。資産を持つと、資産には金利が付くわけですよ、リターンがあるので。そうすると、金利付かない現金というもの、お金、預金というものを出して、当座預金お金使わないですよ、現金も金利付かないんですよ。金利付かないものを負債を出しておいて、それで代わりに資産をもらおう。その資産には金利が付く。そうすると、これが通貨発行益なんですよ。それで、この通貨発行益は、日本銀行は結構ものすごい金額になるんですよ。どうするかっていうと、自分の経費を差引いた後、全部国に税金として納めるんですよ。通貨発行益は国のものだからですね。一度日本銀行の経理には立つんですけど、税金として納めると。

そこでリブラが問題視したのは、リブラってリブラを出します。中央銀行マネーの代わりにリブラを出します。その代わりに日本円とかドルとかをもらうわけですよ。もらったお金をどうするかっていうと、担保として預かりますっていうんですね。預かったお金、現金でじつと持ってるわけじゃなくて、運用するんですよ。運用した、運用益は誰のものか。リブラを経営してる人たちで山分けしますって言ってるんですよ。これ、通貨発行益を国家から奪っちゃう行為なんです。結構、もし途上国の人たちが自分の国のお金を捨てて、リブラのほうに行って、なけなしのドルっていうのは、他の国のリブラ協会が持ってって、それを運用した利益を取ってしまうと、その国の、その途上国で現金を出して、通貨発行益を得たい、その国の人たちの生活を支える現金っていうインフラを出して、通貨発行益を得て、それを国のお金として使いたいといったものが奪われちゃうんですよ。これって、駄目でしょうっていう議論があったんですよ。何で勝手に取っていくんですか、人の国のお金をついていうんですよ。これは、違う意味での税金のちょっと問題としてあったので、今、ちょっとご紹介しました。

それから一番最後の質問なんですけれど、私、フィンテック企業、仕事柄、フィンテック企業の方といろいろお話することがあるんですけど、彼らがどこにビジネスチャンスを見いだしていくかっていうと、まだ法が定まってない、規制が定まっていないようなところっていうところに、よりビジネスチャンスがあると。もう既に体系立った規制なり運用なり慣行なりがあるところって、みんなプレーヤーがいっぱいいいて、もうレッド・オー

シャンになってるわけですね。そこに入っていったって、よっぽど技術性みたいなものがないと駄目であるので、まだ何もない、ルールがあんまりよく分かってないグレーゾーンのところ飛び込んでって、そこで新しいビジネスを切り開いていくんですっていうことをおっしゃる方が結構多いんですね。

それは、既存の大企業がやるビジネスにおいても、一つヒントになるんだろうなと思いますよね。同じとこ行ったらって、やっぱりレッド・オーシャンで戦わなきゃいけないから、収益って多分出てこない、出しにくいだろう。よっぽど技術的優位性があるってそれを使えばっていうことあればいいでしょうけれどね。ただ、そっちの戦略はあるんだろうなというのは、頑張ればできますっていう人もいるので、その戦略があるんだろうな。ないところ、よく分かってないところに突っ込んでいくっていうのは一つあって、それをテクノロジーがサポートしてくれて、そこに何かのアイデアを見いだしていくっていうことが、一つのチャンスなんだろうなと思います。

—— ありがとうございます。

藤山 はい。ありがとうございます。ちょっと時間が足りなかった感じが、ちょっとありますけども。私はきょう、講義の中で考えたのは、松元さんがおっしゃってた、お金は信用であるんだけど、その中で記録っていうことも大事なんだけど、記憶っていうことも大事で、記録だけではないんじゃないかっていうことをにおわせて、お話をされてたところがありましたね。ブロックチェーンなんかは、記録は完全にできるんですけど、これは忘れてくれない記録だけが残っていくっていう感じで、それが本当に信用を創造するのかわかっていうのは、ちょっとよく分からないところもあるなっていう感じが。

松元 ちょっと最後に一つ。

藤山 はい。どうぞ。

松元 最後に、事前にいただいた質問で、他の質問、大体お話の中でお話ししたつもりなんですけれども、貨幣愛は存在しているのでしょうかという質問。どなたがご質問されたかわからないけども。日本人の貯蓄性が高いとあって、それに関連してのご質問みたいですけどね。貨幣愛っていうか、やっぱり貨幣に対する捉え方っていうのは、やっぱり国によってっていうか、民族によって違いはあるんだろうなと、私は思ってます。

日本の場合は農耕社会なんで、農耕社会っていうのは信用の上に成り立ってるので、村の中っていうのがすごく大事なので、先ほど折り紙の贈与のって話がありましたけれども、そういう贈与が半年たってっていう、こういうのが成り立っていく。あるいは江戸時代の手形、回り手形になる、為替が発達してる。先物市場っていうのも、日本で初めて(###

@03:04:03)で出来上がって、要するに、非常にそういう農耕社会の信用っていうのが大事にされてきた。それと同時に、徳政令って時々されるんですよね。チャラにしちゃった。これやっぱり災害が多いという、農耕社会の中で災害が多い、そういう中で水に流しちゃう。水に流したら、普通はもうあと誰も信用してくれなくなるんだけど、水に流して、また信用するっていう。これがね、やっぱり日本の一つの経済社会の形なんだろうと思うんですね。

だから、IT でいろんなアプリケーション、諸外国ではこんなのはやってますよって言われてもね、日本の社会の中でちょっとそれはあんまり合わないようだねとかね。だからそういう中で、日本に合ったようなアプリっていうのが開発されると、日本の中では結構使えるとかっていうのもあるんじゃないのかな。いずれにしても貨幣っていうのは、経済活動を成り立たせてる、一番の基盤みたいなものですから、そこは経済活動っていうか、要するに人間の活動、社会活動の基盤みたいなところ成してるっていうのがありますから、要するに日本だけで割り切れるっていうものではない。それが、貨幣愛ということのお答えに、それがなるかどうかはあれですけど。そんなことを最後に。

―― ありがとうございます。

藤山 ありがとうございます。最後のお話は、非常に示唆的であったかと思います。ちょっと時間オーバーしましたが、本日は、実務をやっておられた、あるいは現在やっておられる方の話を聞けて、非常によかったんじゃないかなというふうに思います。特に現役の(#####@03:05:51)である副島さんには、われわれはお礼をする手段がないわけで、完全ボランティアでお願いをしておりますので、皆さまの拍手がお礼になるかと思います。松元先生と副島先生に、盛大な拍手をお願いいたします。大変ありがとうございました。

(了)